

近世近江地方の魚肥流入事情

—湖東農村商人の相場帳の紹介(一)—

鶴岡実枝子

幕藩体制社会の構造的解明が、戦後の日本近世史研究の共通の関心事として、各分野の視角から精力的に取組まれてきたことは、こと改めて断るまでもないが、その進展に大きな障碍となっているものの一つに、同時代の統計的資料が極めて乏しいことが挙げられる。特に、金銀錢三貨が地方的偏差を持ちつつ通用した複雑な貨幣機構のもとで形成された各地の連統的な物価資料の欠如は、商品流通史の分野に止まらず、各分野の障壁となっており、近時の物価史研究の抬頭は、その部門の緊要性を痛感される発露にはかならないし、資料欠如に対する警告の役割を果たしている。

小稿では、当館所蔵の近江国湖東地方の一農村、蒲生郡鏡村の米商人玉尾家(屋号は米屋)文書中に発見された「万相場日記」を整理することによって、地域的にも時間的にも限られたものに過ぎないが、全国的な物価資料整備の間隙を埋める一素材に供したいと思う。

一 江州鏡村玉尾家と「万相場日記」

近江八幡町の西南、野洲郡境に接して位置する蒲生郡鏡村（現在、蒲生郡竜王町大字鏡）は中仙道に沿った街道村で、武佐・守山両宿の中間にあって、往古は鏡宿とも俗称され、宿駅の指定はうけていないが、公用人馬の小休止所として本陣・脇本陣も設けられていたという。蒲生・野洲両郡内で一万五、七〇〇石余（他に飛地として河内国交野郡星田村の内に一、三〇〇石あり）を領知する仁正寺藩（文久三年西大路藩と改称）市橋氏の所領に属し、村高九五

二石四斗八合（慶長六年検地、以後再検地の形跡なし）、耕地面積は六七町六反七畝歩余、うち田方が六五町二反六畝歩余と総耕地の九六・四％を占める水田村落である。

律令制以前からの古墳・古跡や、小字名に条里の呼称を伝える同地の開村は、可成り古くまで遡り得るとされているが、玉尾家が何時頃から同地に居住したかは詳かではない。江戸期の同家の保有地規模の判明する最古の年次は元禄五年（一六九二）で、一畝六歩の屋敷地と、一町三反歩余の耕地で計一六石七八二五の高持百姓である。そのうち、第一表にみられる通り「元誰某分」と記された他家名請地が半分を占め、慶長検地の名請をそのまま伝えるものか否かは判らないながらも、元禄以前の同家の土地集積状態を示している。同家の集積の経過については一切不明であるが、その後の村内での持高の規模は、享保八年（一七二三）二九石八斗九升三合余（諸引高分を差引くと正味高二七石四斗六升七合）、文化二年（一八一五）には正味高三四石九斗八升四合と増加し、村内では最高の四五石余に次いで第二位の高持となっている。村庄屋就任は文化一一年以後のことで、断片的な村方史料しか伝わらないため、同家の村

第1表 元禄5年玉尾家保有耕地

	玉尾家名請分	他家名請分	計
田	63畝10歩	63畝17歩	126畝27歩
畑	1"26"	1"22"	3"21"
計	65"09"	65"09"	130"18"

「名寄帳」による

内での位置を知ることが困難である。屋号を米屋と称し米商に携わり始めた年代も未詳であるが、同地における領主の年貢徴収の形態は、畑地を含めて形式的には皆米納方式であるが、現実には月並金と称する先納金の徴収が領内の有力農民の負担に於て行なわれ、收納期に差継直段と称する領主の御定直段によって、定式の利息分を加えた額を返済する形で先納分が年貢納入額から控除され、残余の年貢米については願金納や村払い若くは八幡町等に於て入札払いに附され、郷藏から直接領主・落札人の指定する場所（主として大津）へ廻送されることが多かったから、在村の穀屋の果す役割は可成り大きかったものと推測される。

このような地方市場における在地米商人の果した機能については、未だ検討を経ていないので後考に譲ることとし、米商人玉尾家に残された相場帳の概要について簡単な説明を加えておきたい。

万相場日記	宝暦5～明和3
諸色相場留	明和4～安永10（天明元）
万相場日記	天明2～寛政11
万相場日記	寛政12～享和4（文化元）
万相場日記	文化2～同6
（表紙欠）	文化7～同12
万相場日記	文化13～文政4*
万相場日記	文政5～同10
万相場日記	天保11～弘化2
万相場日記	弘化3～同4
万相場日記	嘉永3～同4
万相場日記	嘉永7～安政2
万相場日記	安政3～同6

* 文政元年11月より大阪相場が別帳となる

上述のように玉尾家が米屋の屋号を称し始めた時期は詳かでないが、現存する「万相場日記」と題する帳面は全一三冊（他に文政元年—安政三年の「大坂相場帳」三七冊）で、その年次の編成は上掲の通りである。みられる通り、文政一年から天保一〇年までの一二年間、嘉永元・二・五・六年の四年分を欠き、弘化二年の後半部分は鼠害のため判読不能であるが、各地の相場の報知を受けた同家で約一世紀に亘って書き継がれた該相場帳の記載内容は時代によって変化し、相場報知の地域・品目・銘柄等も必ずしも一貫していない。或る時期には一地方の相場が集

中のに頻出するかと思えば、後にはばったり跡絶えてしまったり、一品目について数種類の銘柄の報知のあった地方

地 名	記 録 年 次	品 目
敦賀	宝暦5～文政5	米・大豆・魚肥
野州茂木	宝暦5～天明4	穀類・錢
江戸	宝暦7年以降	穀類・塩・油・錢
江州江頭	宝暦6年以降	穀類・魚肥
大坂	宝暦9～文化5	魚肥・建物米正・帳合 油・粕類・塩・金銭
宇都宮	天明7～弘化4	穀類・錢・くりわた
其他各地*	化政期以降	米

* 金沢・下関・勢州津・須賀川・兵庫・庄内酒田等

が、時期によって一銘柄だけの報知に簡略化するなど、また発信人名の記載の有無も一定しない。このような変化が玉尾家の経営に如何なるかわりを持ったかは興味のあることであるが、それは今後の課題とする。概して云えば同家の米取引にとって重要な位置を占めていた大津相場及び同相場を規制するところの大きかったところの大坂相場（文政元年以後、大坂相場だけ独立して別帳となる）を中心とし、他は時期・品目等に精粗が著しいが、比較的連年に亘って相場報知の記載のある地名を拾ってみると上掲の通りである。

米と共に干鰯商を併わせ営んだ同家が、敦賀・江頭や一時的ではあるが大坂の干鰯商から相場の報知を受けていたことは肯けるが、下野国茂木町や宇都宮などの報知を受けていた理由は明らかではない。ただ全国市場の形成が諸国相場見競べの風潮を可成り鋭敏に一地方の在村商人の許へまで及ぼしていたことは窺える。

これら各地の相場報知には発信人の人名が記されていないものがあるが、米に関しては玉尾家への直接の情報源の大半は、大津の米問屋であったと思われる。

享保一五年（一七三〇）大坂堂島に於ける帳合米取引の公認に引続き、幕府は元文元年（一七三六）大津・京都に於ても延米相場の立会を許可している。その後下関・伊勢津など各地で行われた延米売買の公認年次は詳かでないが、堂島の商慣習を記した「稲の穂」に次のような説明がある。⁽¹⁾

懸合浜又懸合場共言

大坂の米直段を見競にして、国々にて空米の商い致し居る場所也

状屋

国々米商内して居る懸合浜始の米懸りの向え、日々正米帳合米之直段并蔵々売もの出米高は、^(附カ)其余浜方之気配は元々、他所他国々申来る夏を聞合して申遣ス、惣而米商内一切の事を書認メて書状して渡世するにより状屋と言。懸合浜としての大津へ、堂島浜の商況を報知することを職業とする「状屋」が何時頃から存在したかは明らかではないが、玉尾家文書中には、「状屋」と目される長崎屋与八から大津の米問屋木屋久兵衛へ宛てた商況報知状が相当量残されているから、大坂以外の各地米相場の報知も、おそらく大津の米問屋を経由して近江湖東農村の米商人に齎されたものと推察されるのである。

このような諸国相場情報化の趨勢は、「万相場日記」の記事にも反映している。各地相場書の前後に書込まれた米相場に直接・間接的に影響する幕府法令の写、地方的な作柄を探知するために各地で派遣される作見人から寄せられる諸国「作割」の交換の記事などがそれを示している。そして玉尾家自身米商人としての気象への関心の深さは、各年次の巻頭に年間一日として休むことなく続けられた天候の記録によって窺うことができる。

前にも述べたように、該相場日記は、大津相場と、同地に直接的規制力を有した大坂相場を主体とするものであるが、大坂米相場資料については比較的整備され、従来から公開されているので、別の機会に譲り、ここでは比較的数量化が安易であった魚肥相場を主体とする敦賀と、極く一時期に限られてはいるが大坂の魚肥相場を併わせて紹介しておきたいと思う。

後掲の相場表にみられる通り、その記載は敦賀については宝暦五年からは文化末年まで、大坂については宝暦九年から文化五年までに限定されている。この時間的限定がもつ意味を俄かには断じ難いので後考に俟つとして、玉尾家の相場日記に大坂・敦賀両港湾都市の魚肥価格が記載されていることの意味を、魚肥の消費市場としての江州農村

の農業構造との関連で若干触れておきたいと思う。特に敦賀では宝暦五年頭初から干鰯と鯿、大坂では初め干鰯、明和九年から鯿肥料が加わってくるので、近世における畿内農業が魚肥の主要部分が干鰯から鯿肥へ転化する経過を、相場表記載のなくなる以後の時期に亘って、江州における肥料商人の動きにあわせて概述しておくこととする。

二 近江農村への魚肥供給地としての前・中期の大坂

近世日本の農業における魚肥の果たした役割の重要性の認識は、農業経営の地域的類型化に金肥の導入如何を指標に求められた戸谷敏之氏の古典的業績以来、現在なお農村史・地主制史研究に継承されている。多肥集約型農業による反当収量の増大、その生産費の中で占める肥料代の比重が、農家経営収支の余剰の有無に大きく作用するし、また収穫物を引当てに前貸の形で販売される魚肥商人の高利貸的収奪が、農民経済に重要な作用を及ぼしたことは、従来から指摘されるところである。

このような魚肥の流通を担う干鰯商人の発生については、先進地畿内の棉作に呼応して、早くも寛永年中、大坂の新鞆町・新天満町・海部堀町三町町人の願によって新たに開鑿された堀川の堀留永代浜に「永代諸魚干鰯市場揚場」の免許を受けたことが伝えられている。『大阪市史』に収録された「三町御開発塩魚干鰯問屋由緒書并ニ雑喉場之由来」によれば、

往古寛永以前迄、干鰯荷物取捌致候ハ、摂州にて尼崎、泉州にて堺のみ、大坂表へハ参着不致候処、水上津出し之弁利を得候ハ、肥物干鰯引受候積りにて堀川を願、御免被仰付候ニ付、魚商売問屋業之者ハ、何れも浦々漁場掛リニ候故、銘々手続を以、国々漁場網元江仕入先銀差遣、新浦等見立、新規ニ網株等取企、鰯漁業相持せ候処、次第ニ荷物参着致候ニ付、五畿内ハ不及申、播州・丹波・伊賀・近江・紀州・阿州、都而拾巻ケ国之百姓商

売人通弁宜敷候付、追日永代浜市場之干鯛買求ニ来集致候ニ付、干鯛中買商売之人数追々出来、三町居住不相成、三町統之町油掛町・信濃町・海部町・敷屋町・京町堀三丁目・四丁目・五丁目迄ニ売買人居流候故、何となく此町々を韮と唱へ、惣名を韮之嶋とも呼風俗候ハ、魚類干鯛問屋仲買一同住居致と言

と述べられている。寛政年間に成立したと推定される同書の記述は、この種の伝書の常として歴史的推移の叙述に不明確さを拭えないが、仲間組織整備の時点での大坂を中心とした干鯛市場の範域を知らせてくれる。

同地の干鯛商（仲買）が、既に承応年間に「我講」なる仲間を結んでいたことは、商人仲間の早い時期の例として紹介されている。当時の仲間は二〇人によって構成されていたと思われるが、その後の仲間人数は第二表の通り、承応から元禄一五年の五〇年間に五倍の増加を来している。このような干鯛仲買の急増は、この時期の畿内における商品生産の発展による干鯛需要の増大を如実に反映したものに他ならない。

第2表 大坂干鯛仲買仲間人数

年	次	人数
承応2	(1653)	20
万治4	(1661)	57
寛文8	(1668)	55
元禄15	(1703)	*112

* 新砌町組のみ的人数、他に新天満町組80名が存在したと思われる

当時の大坂の干鯛入津量を示す数字としては、従前から紹介されている正徳四年（一七一四）と元文元年（一七三六）分とがあり、前者は銀高にして一七、七六〇貫二八九匁、後者は同三、四九二貫目となっており、両者の銀額には相当な開きが認められる。脇田修氏は、この両年の銀額の比較には、その間に行われた改鑄を考慮に入れなければならないことを指摘されている。そこで入津実数を測定するために、正徳四年仲間の分裂が干鯛直段の騰貴をもたらすものとして市場調査を惣年寄から受けた際、惣干鯛屋中が提出した願書中に記された同年の干鯛相場、老俵ニ付上分九二―三匁、中分七二―三匁、下分六〇―

五〇匁から、平均七三匁として入津銀高を俵数に換算すると、約二四万三、三三〇俵という数字が得られる。元文元年については平均相場が得られないため、寛保三年の同仲間書上に記された享保九年以降の入津俵数および平均相

第3表 中期の大坂入津干鰯

年次	数量	銀額	平均相場 (1俵=付)
正徳4 (1714)	(24)	17,760	73.00
享保9 (1724)	130	(942,500)	享保新銀 7.20~7.30
" 19 (1734)	50	(4,500)	" 9.00
元文1 (1736)		3,492	
" 4 (1739)	30	(64,500)	文字銀 21~22.00
寛保2 (1742)	25	(58,750)	23~24.00

注 数量、銀額の()内の数字は推計

場(関東干鰯による)によって、元文前後の入津量を推算したのが第三表である。

享保九年の一三〇万俵は、うち三〇万俵を焼失した旨注記があるが、前後の年に比べて異常に多いことに疑問がもたれるが、享保九年を境に、入津俵数は著しい減少を示している。

大坂へ入津する干鰯の産地としては、元文元年の調査に、安房・武蔵・上総・下総・常陸・備後・周防・長門・紀伊・阿波・伊豫・小豆嶋・土佐・筑前・筑後・豊後・肥前・日向・対馬の一九カ国が挙げられているが、自然的条件が強く作用する漁場の興廃・移動は、大坂の集荷地域を著しく変化させたい。前引の寛保三年の仲間書上に、正徳以前迄は他国の入津がなくても、一国分だけで充分大坂近国の需要を賄い得たとされた漁獲量抜群の薩摩の国名が見られぬのが、その好例である。このことは、つぎに掲げる寛保三年摂州島上・島下両郡八〇ヶ村から干鰯高騰のため難決を訴えられた際の大坂干鰯商仲間の答申の中の全国的な仕入漁場の景況の記述にも、よく表われている。

東国漁場

一相模 近年不漁、尤漁場無數御座候

一武蔵 右同断

一安房 去ル申年迄ハ大概漁事有之候へ共、酉年已来不漁ニ御座候
(元文五十一筆者註、以下同) (寛保元)

一上総 右同断

一下総 (享保末年頃) 此国十ヶ年以後嚴敷不漁

一常陸 此浦方右安房・上総同前ニ御座候

奥州之内

南部

仙台 此場所も近年不漁ニ御座候

岩城

西国筋漁場

阿波 近年漁事無御座候

土佐 今年漁事無数、何ほとも登り不申候

伊豫

右同断、但此式ヶ国漁場無数候

豊後

右両国は第一之漁場ニ御座候故、当地問屋私共、以前々網方へ仕入仕候得共、年々打続不漁ニ付近来ハ悉ク仕入得不仕、仍之次第網株減少仕候而、大漁之節も以前之通万数得取上ヶ不申候事

筑前 今年大不漁ニ御座候

肥前 右同断

日向 此浦方昨年迄ハ大鉢之漁事仕候へ共、今年不漁ニ付登り高格別無数候

対馬 此国も近年漁事無之候

長門 近来不漁ニ御座候

近世近江地方の魚肥流入事情(鶴岡)

紀州

熊野 右同断

北国漁場

出雲

躰

因幡

越後 浦方近年大躰之漁事仕候得共、当地へは何程も登り不申候

越中

若狭

右之外浦辺之国々都而漁獵ハ仕候得共、員数ニ及申程之儀無御座候

前にも述べた通り、承応年間既に仲間を組織していた大坂の干鯛仲買は、元禄一年に至って加入銀その他に関する本格的な仲間規約を制定しているが、その背後には、仲間成員の増加の他に、従来の主要仕入地であった西国漁場の不振と、東国漁場の進出という集荷圏の変化と、それに伴う流通機構の変質が無視出来ない条件としてあったと思われる。

近世初頭以来、紀州漁民の出稼漁として開拓された関東漁場は、地元漁民の技術習得・江戸の発展と共に、出稼漁業は元禄期を境として急激に衰退し、享保末年にはほぼ消滅したとされている。⁽⁸⁾ 出稼漁衰退の直接的契機は元禄一六年関東沿海を襲った大津波に求められているが、寛永一九年に株立てされ、前期に於て上方への魚肥輸送の中継地間屋として出稼漁民と結びついていた浦賀問屋の凋落と揆を一にする。

関東の地元漁業と結びついて抬頭した江戸干鯛問屋の株立ては元文四年であるが、彼らが江戸深川に確保した四カ

第4表 江戸干鰯揚場四ヶ所

創始年次		仕入地盤
元禄9	子浦	鰯子浦 夷隅海岸 九十九里浦
" 13	子浦	
宝永6	子浦	
享保20	子浦	
銚子 永代 元江	場場場場	

所の干鰯揚場の成立は、元禄九年から享保二〇年の間であり(第四表参照)、上述のような関東産魚肥の流通機構変化の時期と、ほぼ符合しているといえよう。

宝永七年(一七一〇)大坂の干鰯仲買仲間金直違のことから内証を生じ、仲間二三四人のうち四〇人が新問屋として分立した事件も、細部の事情は明らかでないが、この新しい流通組織が編成される途上での、仕入地盤を異にする新旧仲買層の対立であったであろうことは、この時の新問屋が、のちに触れる通り、享保以降穀市場で支配的地位を占めるに至る関東積合⁽⁹⁾・関東問屋の前身であったことから推察できる。

元来、大坂における干鰯取引は、正徳四年の仲買願書に「先年々北国・西国・関東筋国々々積登り、此九町之内へ因縁ニ着ケ候而売払、仕切代銀落着仕、又五畿内其外近国之百姓中も右同前ニ縁次第ニ宿着仕、干鰯買立させ、何れか問屋とも何れが中買とも其無差別、売候時ハ売問屋、買候時ハ買問屋と成、凡年数及百年ニ商売仕来り申候、然ル所ニ五ヶ年以前寅ノ年(宝永七年——筆者註)金直違之義ニ付四拾軒之干鰯屋共問屋分と申立、一同いたし中間ヲ拵、惣干鰯屋とも式行ニ成」と説明されており、商品生産・農業生産力の上昇に伴う干鰯需要の増大、流通機構の変化は、仲間内部に商業機能の分化を醸成していったことが窺える⁽¹⁰⁾。もっともそのような分化も完全に整理されたものでなかったことは、「大阪肥物商組合一斑」に記された「関東積合」の説明によって窺える。すなわち

抑モ我地(大阪——筆者註)ニ輸入シ来リシ肥料ハ西国物ヲ初メトシ、北国物・関東物之ニ次キ、後チ松前物ノ至リシモノナリ、而シテ西国物・北国物ハ仲間全般ニ於テ取扱フモ、関東物ハ関東積合ナルモノニ限り、松前物ハ松前最寄組ナルモノニ限り取扱フ所ナリ、関東積合ハ古来仲買中ニ於テ別ニ一派ヲナスモノナリ、換言スレバ

仲買中幾部分ノ者カ立ツルトコロノ組合ニシテ、此者ヤ西国・北国物等ニ於テハ仲買ニシテ、而シテ関東物ニ於テハ問屋ノ業務ヲナス故ニ、又関東問屋ト通称ス、人数大抵十七八名ナレトモ、皆仲間中錚々タルモノナレバ頗ル勢力ヲ有シ、何国産ノ肥料タルヲ問ハス、総テ当地ノ相場ハ古ヘヨリ今ニ、此組合員ノ定ムル所ナリ

と述べられており、宝永以降度々くり返された仲間の分裂は、このような未成熟な商業機構の下で生ずる営業權益をめぐつての利害關係の対立が表面化したものであったと思われる。したがって分裂にまでは進行しないながらも、仲間内部では共通の權益を有する者同志がグループをつくり、外にはその既得權益を確保し封鎖的なものとしながら、中では競争を抑制しようとする動きが必然化する。このことは一部仲買の荷請問屋化と共に、売捌きに関する仲買の地域別小組合の結成となつて表われる。そのそれぞれの成立の時期は不明であるが、摂河農村を顧客とする「積合中」(又は積方とも云う)、近江の販路を確保した「江州積合」などがこれである。

先にみた通り、大坂へ集荷される魚肥の市場は、需要に厚薄の差はあれ、五畿内から播磨・丹波・伊賀・近江・紀伊・阿波の十一ヶ国に及んでいた。この地域的拡がりを時間的に確めることは出来ないが、農村における魚肥利用の普及は各地に干鰯商人の出現をみることになる。彼らもまた仲間を結んで消費地への売捌きに當つたから、地方へ販路を持つ大坂の干鰯仲買は、次第に買次問屋化する傾向を強めていったと思われる。

三 近江湖東地方の干鰯商仲間

大坂の干鰯商の販路の一として挙げられ、宝暦―文化の間に湖東へ相場の報知を齎している近江地方の魚肥の利用については、正徳五年正月八幡町・江頭・田中江・常楽寺の干鰯屋中が、農民への売懸代銀滞りを防止する申合わせを行なった、つぎのような「中間極」⁽¹⁾によつて窺うことができる。

田作こゑ類商人中間極之事

一 近年田作こゑ類代銀不埒ニ付銘々帳面吟味仕、卯年々辰巳午四ケ年以來こゑ類売懸滞申仁を書付、中間江出シ可申事、

方々ニ而買掛り不埒之仁、こゑ類代銀大分有之を算用不仕仁、横道ニ而済シ不申候仁、又は少々ニ而も致し方悪敷仁

右之品々面々手前〱ニ而とくと致吟味、売懸有之仁ニも其様子を申聞せ、其上ニも不埒成ル仁は、中間江書付出し可申事、

一 中間之帳面ニ書付ケ出し候仁江こゑ類売申間敷候、縦当銀ニ買可申と申候とも帳面江出し申仁ニ候ハ、其さき〱算用相済不申候内は売申間敷事、若帳面ニ書付出し申仁を存知ながら売申人於有之は、科惣として銀拾枚宛中間江請取可申候、尤其仁不埒を申候ハ、其所之商人中として相弁、科惣銀出し可申事、

一 右帳面江出し申候仁こゑ類取寄せ申候を見届ケ候ハ、其印を吟味いたし売出し申所を詮儀可仕事、勿論牛馬ニ而付ケ通り候を見付候ハ、押へ置詮儀可仕事

右之通中間同心之上ニ而相極メ申候、然ル上ハ右之儀ニ付万一六ケ敷事出来仕候ハ、入用銀惣掛リニ可仕者也

正徳五未年正月

八幡町干鯛屋中

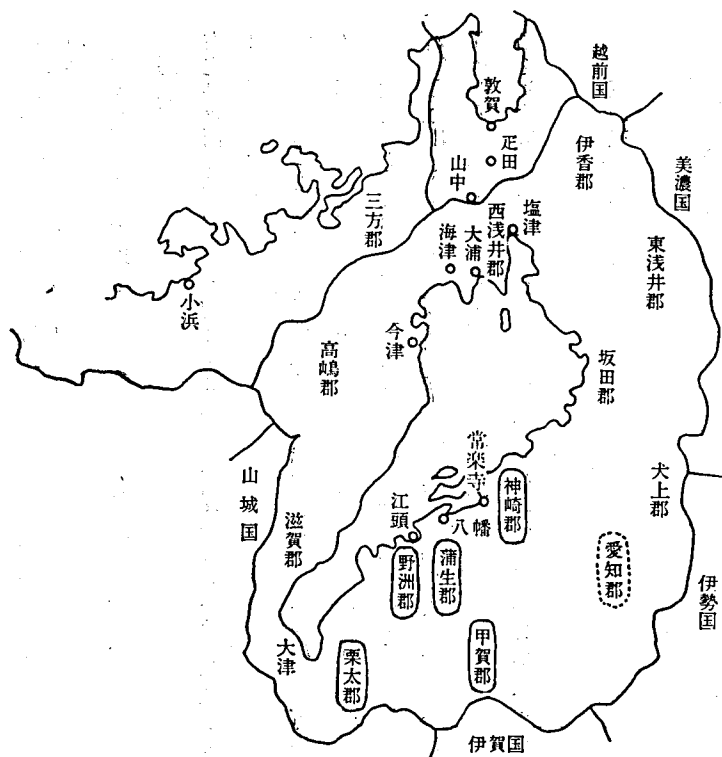
江頭干鯛屋中

田中江干鯛屋中

常楽寺干鯛屋中

蒲生・野洲の湖東地方に、遅くとも正徳初年には農耕肥料に魚肥が施用されていたことが知られる。湖上輸送の便

江州六郡干鰯屋仲間分布図



に恵まれたこれら町村に当時存在した干鰯商人の実態や仲間の構成などについては知り得ないが、彼らの最大の関心事は、延べ売りの形で販売される肥料代銀の回収であったことは、その後も享保年中・元文二年と、この種の申合わせの再確認を行なっていることから察せられるが、特徴的なことは近隣の商人同志が横の連携を密にして、滞り人のブラック・リストを作成するなどの対策を講じ、売掛代銀滞り防止の効果を強化していることであり、当地方の干鰯の利用が可成り一般化していることを物語っていると思われる。

この種の在地干鰯商仲間の組合全体の動向については、遙か後年の文政十二年に上記の野洲・蒲生両郡のほか、栗太・甲賀・神崎・愛知の四郡を加えた九組の仲間が惣寄会の上、申合わせを行なって居り、湖東

地方一帯に仲間連合が拡大されていることが判る。この間、寛政四年八幡町では仲間一六人が単独で株立を出願し免許されているが、その際領主（朽木氏）へ提出した仲間定書に、敦賀・大坂両地仲買の在々への直売を抑止する条項を設けている。⁽¹²⁾

なお六郡の連合体をなしていた文政時の肥料商仲間組合の性格を窺うために、文政一二年の「定書」を次に掲げておこう。⁽¹³⁾

定書之事

一肥物口銭正差銀売附方、買元直段より五分口銭に治定可仕事、

但シ仕入直段先金渡シ又は延買杯之事ハ別段なり、

一鯉白子数子仕入方正路ニ致、正味目方相改、不足致候ハ、荷主江引合可申候、尤定目通より内味減少之注文堅致間敷候事、

一鯉懸目売井ニ箇売之儀ハ、其組々百姓方之氣辺ニ順し商内可致事、

但シ一統正味目方急度相改候上ならてハ、百姓方へ売払之義致間敷、尤見越之米替相止メ、大津相場之引格を以而直組可致事、

一不埒之商内致候仁ハ敦賀表へ申遣し印留メ可致支、尤承知致さぬ仲買江ハ江州一統を取引致間敷事、

一不埒之百姓方江ハ其組々ニ而申談取引相断、仮令組違ニ而も決而取引致間敷事、

但シ其組々にて例年初寄ニ而取調、統之組々江たがひくゝに及沙汰置可申事、

一敦賀より無印送り出し、又ハ銘々印貸シ堅無用之事、

但シ当組々より印貸し相改メ候上、敦賀入魂仕、自分買物等唱し可申事曾而相やめ、又敦賀を無印被送候とも

湖東問屋向ニ而預リ申間敷様、組々之手先問屋方江申談止メさせ可申事、尚又問屋向ニ而商内被致候ハ、差留可申なり、

一諸代呂物直段不知内ニはた売致間敷事、

尤白子抔ハ例年急キ御入用之組々も有之候とも、直立無之代呂物勝手ニ直段相立売捌致間敷候事、

一例年組々惣寄致し、相互ニ商売筋之義因ニ熟談可致事、

右之条々此度惣組打寄相定メ候は、御互ニ急度相改正路ニ可致候、若此件々ニ相違之御印ニ而も相聞江候ハ、たとへ外組々たりとも其組之御行司へ差込、印留ニ可仕候而仲間相除ケ可申候、依而連印左之通ニ候、以上

文政十二年丑五月二十日

野洲栗太組行事印

江頭組行事印

八幡組行事印

常楽寺組行事印

八日市組行事印

甲賀組行事印

日野組行事印

中野組行事印

川北組行事印

売口銭は仕入直段の五分と定めるが、先買・延買分についてはその限りにあらずとあるところからみて、江州肥料

江州五郡干鰯屋仲間人員 (弘化3年8月改)

組	町 村 名	人 名	組	町 村 名	人 名
野 洲 組	野 洲	米 屋 十 藏	江 頭 組	江 頭	麻 屋 小兵衛
	赤 野	丹後屋 佐兵衛		" "	干鰯屋 伝兵衛
	" "	酒 屋 久太郎		" "	伊勢屋 幸右衛門
	小 嶋	川村屋 弥兵衛		仁 保	干鰯屋 亀 藏
	幡 磨	肥 屋 茂兵衛		" "	干鰯屋 惣右衛門
	阿 留	加賀屋 安兵衛		" "	酒屋 四郎右衛門
	幡 磨	丸屋 五右衛門		" "	布 屋 佐 助
	石 田	肥屋 市良兵衛		紺 屋 町	灰 屋 半左衛門
	小 篠	穀 屋 庄 七		大 篠	干鰯屋 茂兵衛
	西 川	米 屋 太 助		六 富	万 屋 万 助
栗 太 組	堤 田	肥 屋 久 藏	八 幡 組	魚 屋 町	納 屋 九兵衛
	野 田	肥 屋 源右衛門		" "	西川屋 善 六
	野 (村)	肥 屋 弥左衛門		寺 内	塩屋 四郎左衛門
	北 (村)	米 屋 半 七		" "	納 屋 嘉兵衛
	守山宿下ノ郷	肥 屋 小右衛門		" "	小西屋 九右衛門
	守 山	米 屋 善五郎		" "	麻 屋 孫兵衛
	金 ケ	西村屋 平左衛門		慈 恩 寺 町	鍛 屋 喜兵衛
	" "	肥 屋 佐兵衛		嶋之郷林村	山形屋 半 六
	大 林	井筒屋 藤兵衛	常 樂 寺 組	常 樂 寺	莚 莚屋 平四郎
	三 宅	縄 屋 市郎兵衛		" "	菜 屋 又四郎
	守 山	米 屋 藤兵衛		" "	米 屋 新兵衛
	" "	米 屋 平兵衛		豊 浦	藍 屋 善右衛門
	" "	豆 屋 喜右衛門		浅 小 井	醬油屋 九兵衛
	大 門	大松屋 孫兵衛		" "	灰 屋 太右衛門
	辻 村	中 屋 安兵衛		長田村大町	表 屋 庄兵衛
	" "	丸 屋 作右衛門		九之里村	木綿屋 半十郎
	小 坂	油 屋 儀兵衛		西 生 来	万 屋 伝右衛門
	横 江	米 屋 庄 七	能 登 川 組	伊 庭	万 屋 庄右衛門
江 頭 組	草 津	勢田屋 伝 助		能 登	粉 屋 清治郎
	勝 部	酒 屋 重 助		" "	米 屋 喜十郎
	菩 提	万 屋 茂 助		" "	干鰯屋 長兵衛
江 頭 組	江 頭	干鰯屋 五左衛門	能 登 川 組	伊 庭	青木屋 喜 内
	" "	干鰯屋 作兵衛		" "	
	" "	塩 屋 藤九郎		" "	
	" "	干鰯屋 与八郎		" "	
江 頭 組	" "	布 屋 新 藏		" "	
	" "			" "	
	" "			" "	
	" "			" "	

組	町 村 名	人 名	組	町 村 名	人 名
日 野 組	瓜 生 津	肥 屋 清五郎	水 口 組	下 田	米屋九郎左衛門
	" "	肥 屋 清左衛門		" 根	米 屋 林左衛門
八 日 市 組	猫 田	十一屋 惣兵衛		岩 本	舛 屋 惣十郎
	内 池	米 屋 安兵衛	高 新 市 土 山	三 牛	油 屋 与 助
八 日 市 組	仁 正 寺	酒 屋 助 吉 藏		杉 深	油 屋 九郎兵衛
	日 越 川 町 房	井 筒 屋 肥 屋 藤	高 新 市 土 山	" 宿	米 屋 太右衛門
八 日 市 組	八 日 市 辻 村	木綿屋 徳兵衛		" 口	菓 屋 彦右衛門
	" "	米 屋 五兵衛	高 新 市 土 山	" 宿	布 屋 金三郎
八 日 市 組	中 野 塚 野	塩 屋 半兵衛		" 口	瓶子屋 庄 七
	古 保 志	油 屋 九郎兵衛	高 新 市 土 山	" 口	塩 屋 佐兵衛
八 日 市 組	中 野	灰 屋 善 八		" 口	河内屋 喜兵衛
	" "	干 鯛 屋 助次郎	高 新 市 土 山	" 口	塩 屋 正九郎
八 日 市 組	" "	和 田 屋 十 蔵		" 口	酒 屋 弥惣八
	" "	村 田 屋 武右衛門	高 新 市 土 山	" 口	塩 屋 治郎兵衛
八 日 市 組	金 今 浜 内	干 鯛 屋 太右衛門		" 口	干 鯛 屋 伊右衛門
	" "	納 屋 新五郎	高 新 市 土 山	" 口	かせ屋 茂 七
八 日 市 組	" "	米 屋 善 勘 兵衛		" 口	塩 屋 儀右衛門
	" "	" "		" 口	八幡屋 久 蔵
八 日 市 組	" "	" "		" 口	米 屋 庄右衛門
	" "	" "		" 口	" "

商の敦賀での信用取引が行われていたことが知られる。そのほか、目方不正の取締り、売代銀の米による決済は、大津相場に準ずべきこと、また売直段に関する規制や荷印の他人貸を禁ずる等々、仲間商品の信用維持のための条項と、注文以外の荷主の送り荷物の差止めは、荷主の直売とアウトサイダー出現の防止策であったと思われる。

この六郡の干鯛商仲間の申合書によれば、当時の湖東地方商人の仕入れる魚肥は主として鯰・白子類であり、仕入先は敦賀に向けられていたことが窺える。この仕入先の比重については、その後天保一二年に九組の仲間連合（総数一二九人）が一統して京都町奉行所へ株立てを出願した際の町奉行所の札問書⁽¹⁴⁾の一項に、「其方共商売筋ニ取扱候干鯛並鯰白子之類、買元は越前敦賀表並若州表仲間屋よりかい受、其余肥シ物類ハ京都・大坂・江州表より買受、近在其外取々百姓中へ売捌渡世致シ来リ云々」と述べられていることから明らかとなる。

第5表 江州五郡肥物屋仲間の構成

組名	町(宿)数	村数	人数
野洲	1	13	15
栗太		10	16
江頭		7	18
八幡	3	1	9
常寺		6	11
能川	2	2	3
登野		4	7
日市	2	6	12
水口		9	20
9組	8	58	111

られる。

これらの組合の編成は、もちろん錯綜した所領関係とは無関係に行われているが、個々の仲間員の屋号には、当然予測されることであるが、米（穀）屋二〇名を筆頭に、酒屋五、塩屋七、油屋五、木綿屋・布屋・麻屋各三等々で、兼業商人の種類を示唆してくれる。

四 北国・松前物魚肥と敦賀

敦賀を経由して近江地方へ搬入される北国の魚肥が何時頃から普及したか、その時期を確かめることは困難であるが、享保九年の神崎郡諸色明細帳による川並村の例では、田方に投入される肥料代が三〇匁から三五匁で、その種類は油粕・にしん・干鰯であったことが紹介されている。⁽¹⁶⁾

近世近江地方の魚肥流入事情（鶴岡）

なお、九組のうち、江頭組に属していた玉尾家の文書中には「江州五郡肥物屋組合記録」⁽¹⁵⁾と題する袋入の簿冊数冊が残されているが、そのうち「干鰯屋仲間印名前附」によって弘化三年八月現在の組合員の構成を（前頁）掲げ、湖東地方の干鰯商人の分布状態を示しておく（第五表）。

九組は五町三宿五八カ村一一人から構成されているが、文政十二年惣寄会の際の野洲栗太組が分れて二組となり、甲賀・中野・川北組の名称が消えて、新たに能登川・水口組が登場するなど、この間に組合の編成替えが行なわれたことを示している。また天保一二年の株仲間出願時からみると一一人の減少を来しているが、その地域的分布も精粗がかなりあったように見受け

こゝで北海道・北国産魚肥の近江国への移入港であった敦賀について、若干触れておきたい。

近世前期において、上方と北国諸藩を結ぶ中継商業都市として重要な位置を占めていた敦賀が、西廻り海運の開通を契機に入津米の激減を来し、中央市場大坂の確立と共に、後背地である近江・伊賀・美濃・伊勢国の一外港としての役割に機能を縮小していったことは、小野正雄氏らによって指摘されている⁽¹⁷⁾。当時の最大の領主的商品であった米の入津量の減少が、この港町の性格の変貌につながるわけであるが、中期以降米に代って主要な入津品となった松前物については、寛文年中の入津品目中に、昆布・干鮭・串貝・いりこ・くじら・にしん・数の子の品名が挙げられており、寛文一〇年の松前物着津売買代金は千五百両程と記されている⁽¹⁸⁾。天和二年の「遠目鏡」によってみれば、当時松前藩々船の船宿が二軒指定されており、同書の「諸問屋附」(第六表)には、これら松前物を扱う問屋三軒の名が挙げられている。該表は当時の港町敦賀の問屋商業組織の分化過程を窺う手掛りとなるものであるが、同書にはこの問屋附について、これらの問屋商人に参集する諸国商人の宿附が記載されている。そこに挙げられている商人宿は、越後筋・庄内筋・津輕筋・秋田筋・佐渡筋・越前筋・加賀筋・出羽筋・若狭筋・海

第6表 天和2年敦賀湊諸問屋

俵物	問屋	60軒余	其他宿有
"	買問屋	40軒余	
銅鉄	問屋	5軒	
松前物	問屋	3軒	金ヶ辻子3名
材木	問屋	3軒	
"	買問屋	4軒	
紅花	問屋	3軒	
多葉	問屋	5軒	
"	買問屋	5軒	
四十	問屋	5軒	
"	買問屋	4軒	
塩茶	問屋	5軒	其外15軒有
御眼	問屋	8軒	
		3軒	

「遠目鏡」(『小浜・敦賀・三国湊史料』所収)

津筋・東江州筋・大津筋・京筋・西国筋・薩摩柳川筋・輪島筋・美濃筋のほか、旅籠屋宿三軒、江指宿二軒があり、当時の敦賀の交易範囲を示すものと思われる。この国別定宿のうち、近江国のみについては海津・東江州・大津・薩摩柳川筋の四筋が設けられており、近江の外港としての地位を表現している。

敦賀港に松前物の入津が大きな比重を占めるに至るのは、この近江地方の魚肥需要の増大と、松前における魚肥生産の発展に拘わるわけであるが、その量的推移の確認は資料不足でなし得ない。ただ敦賀を拠点とした松前交易が、他の北陸諸港に比べて優先したであろうことは、天和期の松前藩船の船宿の存在と近江商人の松前進出とを関連づけて容易に察知される。

近江商人の松前進出が近世初頭から行われたことは口碑の伝えるところである。その最も早い時期の代表とされる愛知郡柳川村の人田付新助は、奥州行商の末、慶長七年津輕の鰺沢に支店を設け、同一五年海峽を渡って福山に支店を設け、手船を以って貨物の輸送販売を行なったとされており、その成功が同郷人の松前進出を誘発したと云われている。⁽²¹⁾

これら近江商人を代表とする内地商人の進出は、当初は松前藩の庇護を受けて行なわれたと思われるが、彼らは次第に単なる松前藩の非自給物資（米・雑穀・衣料・雜貨品）と水産物を主する同地産物の交易に止まらず、漁場開発をも行なったから、それは同藩の特殊な知行形態である場所持の運上請負の制に発展し、漁撈技術の改良・進歩、新漁場の開発を促進させたと云われている。

場所請負の始源は詳かでないが、享保初年頃までは遡り得るとされている。⁽²²⁾ また鯿は鰯網、鮭や鱒は鉋なを使って魚を捕える極く幼稚な漁撈法から刺網・引網を用いるようになったとされる時期も判然しないが、延宝元年越後国刈羽郡荒浜村の牧口庄三郎なる者が松前へ漁網の販売を試み、宝永年間これに改良を加えて販売量を増したと伝えられており、漁網の普及を示唆している。たゞ松前藩では細民保護の見地から大網の使用を禁止したというが、その禁令も蝦夷地までは及ばず、請負人の中には非合法ながら奥地で大網を使用する者も少なくなかった模様で、大網の普及が漁獲量の増大——内地への移入量の増加となつてあらわれたことと思われる。この漁業技術の改良・進歩の時点を把

える確かな根拠は乏しいが、松前藩における漁業税の改制が憶測の材料を提供するものである。すなわち、享保四年、従来漁獲高の如何に拘わらず一戸につき干鰯十四丸（一丸は鰯二百本、但し東部諸村はその半額）であった鰯役を、漁獲高の一五分一を徴収することとした。これは新技術導入の偏差によって、各戸の漁獲高に著しい不平等が生じ来ったためとされ（宝暦三年からはこの一五分の一の鰯役は漁船規模に応じた金納制となる⁽²³⁾）、先の場所請負開始の時期と見合わせて、この時期に一つの劃期が認められるように思う。もっとも場所請負に関する史料は天明・寛政期以降のものが多く、それ以前についての実情は余り明らかにされていないが、『新撰北海道史』には同地の漁業の進歩は宝暦以後めざましかったとされており、場所請負の本格化する同時期には、一段と漁獲量の増大が考えられてよからう。同書はまた元文四年の著作にかかる「北海隨筆」に拠って、当時の鰯肥料の販路は南部・津軽・出羽・北国地方より近江地方に亘るとされ、また天明四年の「東遊記」を引用して「此鰯むかしは北国のみにて用いけるよし、今は北国はいふに及ばず、若狭・近江より五畿内・西国まで不残田畑の養となす、干鰯よりは理方よしといふ。関東いまた此益あるをしらず」と、その後の本土における普及状態を説明している。

前節において、中央市場大坂における中期までの魚肥の集散状態の歴史的推移を、同地の干鰯商仲間の動向から極く大雑把に解説を試みた。その節引用した寛保三年の古問屋・中買中の上申にみられる通り、大坂に集荷される干鰯類は、大きく分けて西国物・東国物・北国物に区別され、前二者に比べ、出雲から越後にかけての北陸漁場に産する魚肥の大坂への流入は僅かなものであったらしい⁽²⁴⁾。このことは寛政二年幕府の行なった物価調査の際の大坂干鰯商仲間の答申に、つぎのように説明されている⁽²⁵⁾。

一石見・出雲・因幡・伯耆・越中・越後・佐渡・出羽・奥州右国々海辺浦々ニテ取揚候干鰯都而北国物ト唱へ売買

仕候、右ノ内其国々ヨリ大阪送り為登荷物モ少々御座候得共、私共ハ不及申、当地三郷并ニ灘内ニ罷在候北国取引仕候他商人并船持共北国筋漁事有之候場所ニ而思ヒ入買仕候儀年来御座候、是等ノ荷物当地私共ノ内ニ手寄ヲ以差向、永代浜ニ而売支配致候共、其内身元髓成者共ハ手分ノ手元ニ持抱、脇ニテ蔵入致、メ売仕、永代浜ノ外ニ持困候ニ付目先ニ相見得不申、前段同様之御義ニ御座候、然上ハ他所他町ニ罷在候北国取引仕候者思ヒ入買、或ハ下ニ荷物ノ掛方ニ取候共、干鰯ノ分ハ当地入船次第永代浜へ水揚蔵入仕候様、御威光ヲ以テ被為仰付被下候ハ、是又下直ニ相成候一端ニ御座候御事

寛保三年の書上げと比べて、北陸地方の漁場の範圍が拡大されていること、そしてそれらの漁場で生産される魚肥は、主として北前船の思惑買によって大阪に搬入され、多く脇売の形で売捌かれる性質のものであったことが判る。仕込金を以って集荷される西国産魚肥に代って、中期以降大坂の取引市場の建て物的存在となつた関東産魚肥も、地元需要の増大、販路の拡散、加えて連年の漁場の不況、国産奨励策にもとづく領主の直仕入の風潮、生産地領主の収入増加策としての新たな漁業課税等による流通網の混乱は、大坂における入津量の減少となつて現われ、干鰯騰貴を齎したことは周知の事実である。⁽²⁶⁾更にこのような大坂における脇売の出現は、元来永代浜のみに売買を特許されていた筈の同地の干鰯問屋商人の後退を意味し、北前船の盛行と共に、既成のルートからはずれた魚肥の流入が増加しつゝあったことを物語っている。そしてこの寛政二年の仲間上申には直接触れられていないが、松前物の魚肥も恐らくこのような形で大坂へ流入していたことが察知される。それは後掲の大坂干鰯相場書のうち、松前物の初見が明和九年であることから証明されるが、当時松前物に限っては、干鰯商仲間に限らない松前物問屋の荷請するところであり、その取扱いはイレギュラー的存在であつたことは、干鰯仲買のうちから松前最寄組を結成して、東組と称した松前物問屋と正式に取引の協定を取結んだのが文政二年であつたことから推測できる。

もっとも、松前最寄組の正式の発足は文政二年であるが、文化初年からその実体が存し、松前物問屋と取引していたことは、最寄組の一員であった神崎屋仁兵衛店の「松前方肝要抜書」冒頭の記事によって窺うことができる。すなわち

文化三寅十一月取締之写

一松前物之儀先年ハ鈔之儀ニ而組外之内ヘ荷物着致、正味銀等ニ而モ取引仕候得共、彼地追々繁栄荷嵩ニ相成所、当嶋ニ限正味銀取引之儀ハ不被相済候間、当嶋之内播州・伊州・江州・丹州・阿州右五ヶ国取引之銘々々番衆ヘ数度及掛合候処、掛合行届不申、双方暫時取引相休申候内ニ双方之内ニも心得違之仁有之大混雜ニも相成儀ニ付双方仲人を以則

一 諸肥物 掛目拾メニ付銀貳分引
右貳分引を以和談ニ及申候也

と、後期に大坂において圧倒的比重を占めるに至る松前物魚肥の大坂入津が本格化する時期及びその販路を推察せしめる。敦賀での中買問屋の株立ては文政元年に行なわれ、また前に記した文政十二年の江州六郡干鰯屋仲間の申合書調印が行なわれたのもこのような大坂の動静とは無関係ではなかったと思われる。

さて、このような松前・蝦夷地産物の本土市場への移入に近江商人の松前進出が重要な役割を果たしたことは疑いないが、場所請負に活躍した近江商人の多くは、両浜商人と呼ばれた薩摩・柳川両村と八幡町人で、彼らは松前・福山・江差に支店を設けてその営業を拡大していったが、正徳の頃から出身地別に組合をつくり、のちそれらを合した両浜組となって松前藩の御用達となり、藩の財用を弁じたから、彼ら両浜商人の交易荷は「荷所荷」と呼ばれ、松前藩における沖ノ口課税も通常の課税基準から除外されるなどの特権を与えられていた。松前から敦賀へ積登される「荷所荷」の内容や数量は判然しないが、敦賀問屋の権益外で、通過荷物として大津・京都方面へ直積みされていたらしいことは、やや古い事例ではあるが、つぎの元文二年の三ヶ所商人の申合書によって窺うことができる。⁽²⁸⁾

定

一於松前從御公儀様被仰渡候趣急度相守、惣て商売方三ヶ所示合相談之上にて無油断相勤候て、荷所積口等我勝ニ致不申候様ニ、松前支配番頭方江此段相達可申渡候事

一從古來申合候通、此後万事猥ニ相成不申候様ニ相談之上相統可致義ニ候事

一荷所船究之節三ヶ所組之内、先年々取立之船ハ不及申、外船極候共、其組之年寄馴染之方江可致相談候事

一從松前登り荷物諸色、古來々大津納屋支配ニ致候処、近年納屋支配不埒故、印之荷物京大坂伏見へ送売払候ニ

付、大津納屋壳弥増不景氣ニ罷成、双方不勝手之筋ニ及申候、依之先年之通、松前物不殘大津江引請支配致度

旨、納屋中より願有之候故、三ヶ所相談之上示合、來午ノ年より登り荷物古來之通大津納屋支配一手ニ致候筈相

極申候、然上以後大津支配方不埒有之候ハ、重而三ヶ所可及相談候事

一京高宮屋善兵衛方江松前荷物為登候義ハ、柳川印御取立故、今更難相止候故、昆布一色に限り指送り、外荷物一

品にても堅為登申間鋪候、尤八幡薩摩所々ハ為登申間敷候事

一組中之外荷物有之候時、支配預り主々大津壳ニ可致候事

一組中之内々外荷物ニ致拔掛先壳堅成不申候事

右定之通三ヶ所寄合之上儀定相極申候、然上ハ相背候印人御座候て外より洩聞候ハ、其印無宥免、組々中相除可申候、以上

元文二丁巳年十一月六日

八幡

中島 市兵衛

中島 与兵衛

福地 長左衛門
丹 羽 惣次郎
岡田弥三右衛門
西 川 伝兵衛
西川 市左衛門
西 川 治兵衛
西 川 善四郎
西川 長左衛門
西川 伝右衛門
小西治郎右衛門

薩摩
柳川御組中江

参

ただし、この近江商人の松前出稼経営も個別にみれば盛衰の差は甚しく、宝暦以降は組合員の減少が目立っており、⁽²⁹⁾他国人の松前進出が顕著となる明和―天明期には場所請負人の大幅な交替などあつて、松前物の中で占める荷所荷の比重も減少していったと思われる。

荷所荷以外の敦賀問屋商人の手を通じて近江方面へ売捌かれる松前物魚肥が、北前船盛行以前どのような性格の荷主によって積送られたか、その実態は詳かでないが、文政元年二〇軒の株立てを認可された敦賀仲買問屋と近江の干鰯商仲間との間で、つぎのような協定を結んでいる。⁽³⁰⁾

文政元年戊寅五月

東江州北江州干加屋中々敦賀表仲買問屋中江応対之上定書

定

一 近來商売方猥りニ相成、渡世六ヶ敷候ニ付、御客様方一統御示談之上、当津仲買為登方式拾軒ニ相定候間、以後定書左之通

一 組々様御名前之外江は堅ク立入り申間鋪候支

一 当津廿軒之外肥シ物類商人自然參候ハ、早速御注進之上差留メ可申候、并素人百姓方々当地江直買ニ被參候とも一切商内不仕候事

一 御客様方ニ而も、此後新ニ組入之御方様又は御仲間御除キ之御方様等有之候ハ、早速御知らせ可被下候、且又当津名前増減等有之候時は御案内可仕候

一 無印物海津・塩津・大浦迄は勝手ニ出シ置可申候。御地上ケ物江は一切出シ不申候、尤無印御注文之儀は御無用可被成下候

一 御印之御荷物之外、海津・塩津・大浦此三ヶ所ニ而堅ク支配不致様申談置候、尤此方仲間かた印等申遣候間、致違背候問屋於有之は御互ニ示合せ荷物差送り間敷候事

一 鯉白子皆掛・正味入之義は、其向々様々御注文次第ニ取計可仕候、尤正味入増引之御注文有之候共、定通りヨリ急度御断可申上候、万一正味入り拾八貫目々目形輕ク候ハ、御引可被下候

但し外品等とも右同様可仕候支

一 鯉白子并品々蒔之儀、薄蒔細縄ヲ以テ仲間一統同様ニ作り立可申候。若厚蒔太縄送りニ而直段不同之商内於有之

は、御差函之上差留可申候支

但し薄蒔細繩之義は来卯年新物類を一統相定可申事

右之通り一統承知之上相極り候ニ付、御組々江巻通ツ、差入置候間、猥り成義御互ニ仕間敷候、以上

文政元年

敦賀

寅五月

買問屋中

江頭御組

干鰯屋御客中様

近江には湖東地方のほか、湖北にも干鰯屋仲間が存在したことが知られ、前節で紹介した文政二年の湖東六郡干鰯屋仲間の申合書も、この時の敦賀問屋との協定を前提として作成されたものであったことが判る。⁽³¹⁾

この敦賀仲間問屋が売捌きに当って取得する得分については、本文で紹介する相場書の時期より遅れて天保一年、手数料の改訂を近江の干鰯屋中へ申送った覚書が見出されるので、当時取扱われた魚肥の種類・荷物の容量などを併せて紹介する意味で掲げておく。

敦賀

当春々改掛物覚

一 鯿 正ミ十八メ目入 五匁式分

一 白子 拾九メ目 四匁式分

内式百目引

一 鯿不口目^(みか) 廿メ目位 四匁三分

一 笹目拾七メ目

四匁

内式百目引

一同拾五メ目

三匁七分五厘

内式百目引

一目切拾五メ目

同

内式百目引

一 数子拾八メ目

四匁壹分

内式百目引

一千鯉正ミ十七メ目

五匁貳分

一 叭 正ミ十四メ目

四匁貳分

十八〇 貳俵ニ付拾貳匁六分五厘

一 穀物十五〇

十匁匁八分五厘

十六五 拾貳匁壹分五厘

一 小柏

貳匁三分

一 メ柏九メ目

貳匁貳分三厘

内式百目引

一千鰯 九〇

貳匁貳分三厘

近世近江地方の魚肥流入事情（鶴岡）

第7表 敦賀の送り荷運賃・経費

「万相場日記」より

品 目	年 次	敦賀の山中 迄 駄 賃	山中の大浦 迄 駄 賃	大 浦 の 江 頭	
				舟 賃	庭
鯡 1 箇	天 保 11	匁 4.95*	匁 1.85	匁 0.38	匁 0.225
	弘 化 3	5.20	1.95	0.38	0.30
白子 1 本	天 保 11	3.95	1.85	0.51	0.225
	弘 化 3	4.20	1.95	0.51	0.30
数子 1 本	天 保 11	3.85	1.85	0.38	0.225
	弘 化 3	—	—	—	—

注：* 塩津廻しは鯡1箇につき7分2厘増し

十〇
七八〇

式匁叁分三厘

五六〇

式匁三厘

右之通御座候

敦賀買問屋㊦

庚子年正月

なお、敦賀から湖北の海津・塩津・大浦へ送られる荷物のうち、湖東地方へは大浦経由が多かったらしい。同地廻しの運賃は、天保一年・弘化三年分について知られるので、上掲に表示した（第七表）。

ところで、近江農村を顧客とする敦賀への松前物魚肥の江戸期における入津量の推移は前にも断った通り明らかでない。場所請負制の確立、蝦夷地における大網の普及、寛政一年幕府直轄地化による東蝦夷地の開発等々、蝦夷地における漁獲量の増大を推測させる条件は多々あるが、その間安永末年から二十数年に亘って福山・江差地方を襲った未曾有の凶漁も、追鯨と称する同地方漁民の西蝦夷地への出漁の増加によって漁場地域の拡大がみられ、鯨漁の総漁獲量にはさ程影響がなかったと伝えられる。もっとも同地における漁獲量の増大が直ちに敦賀への入津量の増加に結果したとは断定し難いところである。

明治一二年開拓使が北海道物産の国内市場開発を目的として、従前から北海道交易を行っていた主要港のうち「京摂及ヒ滋賀・石川・山口・島根」地方

第8表 明治11年北陸諸港における北海道移出入価格

	移 入			移 出		
	全移入額 (A)	北海道より の移入額 (B)	$\frac{B}{A} \times 100$	全移出額 (A')	北海道へ の移出額 (B')	$\frac{B'}{A'} \times 100$
	円	円	%	円	円	%
滑 川	132,130	50,809	38.4	161,040	41,035	25.5
東 岩	—	57,690	—	325,050	133,690	41.1
伏 木	1,957,340	507,055	25.9	2,002,668	477,405	23.8
七 尾	651,800	63,150	9.3	802,513	114,780	14.2
坂井(三国)	343,720	135,500	39.4	335,840	62,935	18.7
敦 賀	282,947	261,410	92.2	41,992	32,208	76.5
小 浜	265,758	37,799	14.2	165,123	26,635	16.1

山口和雄『明治前期経済の分析』P254より

を対象とした調査報告「二府四県采覧報文」には、敦賀港について次のような復命を行なっている。⁽³³⁾

今般巡回スル所ノ各港中大阪ヲ除クノ外越前敦賀ヲ以テ最モ要港トス、故ニ今試ニ其得失ヲ論センニ北海道ヨリ該港ニ輸スル魚粕其他ノ肥料価格毎歳無慮貳拾万円内外ニアリ、又該港ヨリ北地ヘ輸送スル所ノ縄延其他ノ物品ノ価格ハ僅々貳万乃至三万余円ニ過ス、毎歳此ノ如ク巨額ノ肥料ヲ輸入スルノ原因タルヤ他ナシ、江州ノ農商ニシテ北海道ニ支店ヲ開キ本県ニ連絡ヲ取ルモノ数百戸ニ下ラス、此支店ハ皆北地ノ人民ヘ多少ノ資金ヲ称貸シテ之ヲ籠絡シ漁獲ノ肥料ヲ廉価ニ買得シ、之ヲ江州地方ニ運送シ為メニ非常ノ巨利ヲ占ムルモノナリ、此巨利ハ即チ北海道人民ノ損失ニシテ、是ヲ大ニ警フレハ印度地方ノ英國ニ於ルカ如シ、云々

富国強兵の殖産興業政策の下で、上からの資本主義育成を焦眉の課題とする開拓使吏僚の評価が正鵠を得ていたかどうかは問わないとして、該報告の対象となった諸港のうち、北陸七港の明治一一年移出入額中に占める北海道交易の比率を検出された山口和雄氏の第八表によってみると、金額の上では伏木港に遥かに及ばないが、比率の上では敦賀が北海道一辺倒とでもいふべき数字を示していることが判る。

因みに「采覧報文」に載せられた同年の「敦賀港輸出入表」によって品目別の金

第9表(1) 明治11年敦賀港輸入表（二府四県采覧報文より）

種別	品 名		原 価	%	種別	品 名		原 価	%
魚 肥	鯪	粕	5,498.44	43.2	光 熱 料	魚 桐 種 生	油 油 蠟	144.00 664.55 1,302.67 1,471.00	1.2
	鯪	白子	49,619.46			(小計	3,582.22)		
	鯪	笹目	407.50		農 産 品	米		4,498.64	2.6
	鯪肥料不撰子	35.20	大豆			1,816.50			
	(小計	121,740.79)	芋			157.50			
			甘薯			192.00			
食 用 水 産 品	身欠鯪子	26,420.74	52.8	品	甘索西菊	薯麵瓜	133.00 125.00 49.60		
	数棒	5,031.80			酒	51.40			
	贊干	5,228.98			白・黒砂糖	220.50			
	塩干	371.80			荏胡麻	32.00			
	塩烏賊	90,930.00			(小計	7,416.14)			
	昆布類	5,246.25							
	開布キ	11,541.62		林 産 品	檜材	97.60			
	塩開	10.08			杉板	60.60			
	塩開	60.00			半紙	55.00			
	塩鯖	9.00			柳行	50			
	塩鯖	578.00			(小計	213.70)			
	魚ノ節	69.00							
鰹ノ節	20.00			(総計	282,946.92)				
	塩	3,812.60							
(小計	149,329.87)								
	鉄	664.20							

『明治前期産業発達史資料』第2集 P31~34

額を示したのが第九表である。「報文」該表輸入の欄には「右輸入品ノ内鯡ノ粕白子等ノ肥料ハ大概近江国ニ輸シ、身欠鯡昆布棒鱈魚ノ子烏賊ノ類ハ近江及西京美濃等ニ販賣スルモノナリ、其他米大豆小豆塩索麵鉄杉板及芋砂糖生蠟半紙ノ類ハ港内人民ノ需要ニ供スルモノナリト云」と、また輸出の欄には「右輸出ノ内蕤蠟蠟燭竹等草履ハ概ネ北海道ニ、石灰ハ多ク加賀国ニ輸送スト云」と注記がしてある。全移入金額のうち、九二%を占める北海道物産のうち、魚肥が四三%、その他も大半は干魚塩魚等の水産物であったわけである。また地元ノ需要に供せられるという米の四、四九八円余は、数量三九六石・一三六一俵と記されているから、一俵四斗で換算し合すると約九四〇石（二三五〇俵）であって、寛文以降減少の一途を辿ったとはいえ、その額の僅少なことは、同じく寛文期に最大の輸出品であった茶

第10表 北海道産魚肥敦賀移入額比較

	安政4~文久1 5カ年平均*	明治 11
鯉	31,224個	25,937個
白子	14,440本	14,149本
メ 柏	4,724本	1,699本

*但し蝦夷地産物のみ

延元年迄の五カ年間の蝦夷地産物入津量調査が紹介されているので、数量の換算が可能な鯉(鰯)・白子・メ 柏三品の五カ年平均数量と明治一一年分とを比較してみたのが第一〇表である。幕末の数字は「蝦夷地産物」とあって、所謂松前物を含まない数字かと思われるが、蝦夷地産物のみを以ってしても、白子を除くほかは、鯉が約一七%減、メ 柏が約六四%減と明治一一年分が減少していることが判る。ただし「報文」中、同年は敦賀港から近江へ通じる琵琶湖岸塩津への新道開鑿中であり、車馬の運行が不自由であったため、入津船の減少を齎したであろうことを附記しているから、同年一カ年のみの数字を以って推量することは憚られるが、大阪での北海道物産の販売市場拡大は、前述の通り安永・寛政頃から化政期に本格化しており、北海道産魚肥の荷揚地としての敦賀の地位の相対的低下は、この頃から始まっていたのではないかと思われる。「報文」中、明治一一年の大坂・兵庫両港輸入魚肥のうち、両港から再移出される

第9表(2) 明治11年敦賀港輸出表

	円
蕨 蕨	16,501.775
草 繩	2,893.00
竹 履	135.40
蠟 箒	3.00
蠟 燭	12,675.00
(小 計)	(32,208.175)
桐 油	931.00
種 菜	480.00
刻 昆	420.00
布 灰	300.00
石	7,653.08
総 計	41,992.255

(近江・伊勢・伊賀・美濃産)の品目が消滅している事実と共に、同港の著しい変貌ぶりを示している。甚しい移入超過の下で移出される品目のうちで主要な位置を占める蕨・蠟燭は、瀬戸内・北陸を航して各地で買積みする北前船の購買対象として挙げられる同地の名産であったことは、「報文」の大坂の項に記してあり、特に蕨・蠟燭は魚肥の梱包材料となったものと思われる。

場所請負制が廃止されて一〇年を経過した該報告書の数字が、どれ程江戸期の敦賀を反映するものであるか判定の材料は乏しいが、参考

第11表 明治10年9月ヨリ11年8月迄大阪・兵庫輸入高

品名	大 阪	兵 庫	計
鯡 柏	111,000石	77,500石	188,500石
鰯 柏	1,500	1,100	2,600
鯡 白	4,000	2,500	6,500
鰯 鯡	68,500	47,900	116,400
計	185,000	129,000	314,000

史料館研究紀要
第三号

大阪・兵庫ヨリ諸国へ再輸出高

再輸出地方	品名	大 阪 ヨ リ	兵 庫 ヨ リ
紀州地へ	鯡 柏	9,000石	7,000石
泉州地へ	鯡 柏・鰯 柏	6,000	8,000
伊勢・尾張地へ	同 上	17,000	5,000
伊賀・近江地へ	鰯 鯡・白子・鯡 柏	58,000	江州ノミ 4,000
阿州地へ	鯡 柏	40,000	15,000
讃岐地へ	同 上	4,000	淡州地へ 40,000
播州地へ	鯡 柏・鯡 白子	6,000	40,000
大坂近在へ	鯡 柏・鰯 鯡	45,000	地方へ 13,000
計		185,000	129,000

「二府四県采覧報文」P317, 332～3より

販路別石数は第一表に示すところであって、伊賀・近江地方へ六万二千石が移出されており、両国への内訳は不明であるが同年の敦賀入津石数二万一千石余を遥かに凌駕していることが窺われ、明治前期における近江地方への魚肥供給事情の変化を推測させる。

因みに鯡肥料の種類のうち、身欠鯡を製した際に残った頭部・背骨・腹部の連接したものが鰯鯡、笹目は切り捨てられた腮部を乾したもので、ともに比較的下等・廉価な部類に属し、西国・大阪地方が比較的高価な鯡を多く移入したのに対し、北陸地方は鰯鯡・笹目等の移入が多かったとされている。⁽³⁵⁾そして「報文」には、近江地方の鯡肥料売捌の割合を、鰯鯡六五、白子二五、鯡柏一〇であったと報じている。

五 近江農村の魚肥需要について

ところで、このようにして敦賀・大阪方面から移入した近江農村における魚肥需要の実態については従来余り紹介されるところがない。正徳年中の八幡町を中心とする千鰯屋中の定書に「田作こ

え」とあって、当時から稲作への投入が行われていたこと、⁽³⁷⁾『滋賀県市町村沿革史』に小稿で紹介している鏡村の近隣綾戸村では享保九年田畑一反に干鰯一・四五石一二石を投入していたこと、同じく岡屋村では明治二年冬春のうち秣刈敷を田地に入れ、夏に一反当り平均一〇貫目程の餅肥料を投入して稲作に全力を挙げている事例等、狭い管見の範囲では主穀生産への魚肥投入を認めることができる。

一般に近世農業における購入肥料の施用は、自給的農業から販売のための商業的農業の展開のうちにとり入れられ、特産地を形成しつつ同地帯の所謂商品作物以外の稲作・麦作等への金肥の投入を一般化させたとするのが通常の認識である。また一口に商品作物といっても、代表的な金肥である魚肥・干鰯の施用は、全国的な市場をもつ特産的な換金作物地帯での利用が優先し、都市の需要に応える近郊農村での蔬菜栽培などには干鰯の利用は余りみられず、在油粕・酒粕・糠・石灰・人糞等、半自給的或いは狭い地域での調達が可能で購入肥料が多く使用されたとしてもは、共通の理解である。そして魚肥の生産地周辺に於ては遅くまでその利用が普及しなかったことも、各地の事例が多く示すところでもある。従って特産的酒造地帯以外の米作地帯での魚肥の利用は、余り早い時期とは結びつかないのが通常の理解であると思われる。このような先入観を以てみると、近江地方の魚肥の利用は予想外に早い時期から行われていたといえよう。もっとも一口に近江地方といっても、日本最大の湖面をもつ琵琶湖を中央に抱えて、湖北の養蚕地帯と湖東・南部の米作地帯とは、農村の経済構造に可成りの差異が認められ、魚肥の流入・利用状況も一様ではなかったろうと思われる。

米作地帯・養蚕地帯の経済構造については、明治一四年に刊行された『滋賀県物産誌』を材料として、明治一〇年代の郡段階における経済構造を析出された甲斐英男氏の勝れた業績がある。⁽³⁸⁾同氏の整理されたところによれば、明治一四年の滋賀県各種生産物価格比（第一二表）によって完全な主穀生産地帯と認定される同県の郡段階での生産物価格比は第一三表の通りである。米

第13表 各種生産物郡別価額比

項目	郡名	滋賀	栗太	野洲	甲賀	蒲生	神崎	愛知	犬上	坂田	東浅井	伊香	西浅井	高島	県平均
米	麦	90.0	88.4	91.3	79.4	90.3	81.1	88.0	90.8	57.1	43.4	63.0	77.6	76.4	76.4
蔬菜	果	0.2	0.8	0.6	0.5	0.3	0.2	0.1	0.2	0.3					0.3
原料	作物	3.6	7.6	6.8	4.3	7.2	8.6	4.0	5.2	10.8	20.0	17.6	13.0	6.7	8.9
畜産	物							0.7							
林産	物		0.4				0.9		2.1	6.7	1.2	3.0	1.1	1.0	1.5
水産	物	1.5	0.2	0.9		0.3	0.3		0.3		0.2			0.9	0.3
飲食	物								0.2						
農産	加工	4.5	2.5	0.4	9.9	2.0	9.1	6.5	0.9	27.8	35.3	16.3	8.3	12.6	11.6
林産	加工				0.4				0.2					0.2	0.1
雑貨	手芸													0.5	
陶器	漆器				4.3										0.4
器具	船舶													0.3	
その他	加工品														
金属	鉱石				1.2			0.8		0.2				1.4	0.3
加工生産物	合計	4.5	2.5	0.4	15.8	2.0	9.1	7.3	1.3	28.0	35.3	16.3	8.3	15.0	12.4
原料作物	第1位	菜種	菜種	菜種	菜種	菜種	菜種	菜種	菜種	繭	繭	繭	繭	菜種	繭
	第2位	綿	綿	綿	綿	煙草	葉藍	繭	繭	菜種	蚕種	菜種	菜種	葉藍	菜種
農産加工	第1位	茶	茶	茶	茶	茶	麻布	茶	生糸	チリメン	生糸	生糸	生糸	チヂミ	生糸
	第2位	紙	生糸	生糸	干よう	生糸	茶	麻布	茶	生糸	チリメン	茶	茶	生糸	茶

甲斐英男「明治10年代の経済構造とその変化」史学研究106号

・麦・雑穀類が八五%以上を占める野洲・犬上・蒲生・滋賀・栗太・愛知六郡がいわゆる米作地帯として指摘される。それらの米作郡は、明治一〇年の「農産表」によれば滋賀県が全国第一の産額を示した菜種を裏作とする二毛作地帯とされているが、農産加工部門の比重は愛知郡の六・五%を最高に極めて低いことが判る。一方、湖北の養蚕地帯を形成した坂田・東浅井・伊香・西浅井の四郡では、西浅井郡を例外として生産物価格比に於ける米の比率は五〇%前後に対し、原料作物・農産加工部門に於て県平均を遥かに上廻る高い比率を示しているのが特色である。以上の米作・養蚕地帯に指摘される一〇郡以外の甲賀・神崎・高

第12表 滋賀県各種生産物価額比 (明治14年)

種別	価額	比率
鉱産物	千円 49	0.3
製造物	770	5.2
農産第1 (うち米)	12,081 (10,842)	81.3 (71.3)
農産第2	83	0.6
農産第3	1,875	12.6
計	14,858	100.0

同上、甲斐英男氏論文より

第14表 滋賀県郡別施肥肥料種別表 明治11年（滋賀県市町村沿革史第5巻より）

郡名	町村数	肥料 記数	肥料 載村 数	餅・ 白類	干鰯	油粕	酒粕 焼柏	醬油 粕	糖	石灰	馬・ 牛・ 肉・ 骨類	鶏糞 牛糞	人糞 尿	厩肥	藻草 ・泥	刈草 枯草	紫英 (ンゲ)
滋賀	75	42	1			12	2	4		11			2		2	5	
栗太	111	76	48			57	3	3		27			2		9	1	
野洲	77	74	66		5	44	0			12					21		
甲賀	124	123	98			44	1		1	30			1		1	17	
蒲生	208	198	192		1	21*	1			37				7	11	22	1
神崎	85	85	80		1	17				29			3	7	9	6	
愛知	122	122	115			103			2	52		2	2		4	8	
犬上	108	106	48		1	72	15		2	19	1	1	2		7	35	6
坂田	154	153	124			56			7	4	2	3	65	5	4	66	6
浅井	126	124	101			105				3	1				2	32	
伊香	76	67	37			22			1	10						40	
西浅井	19	0															
高島	109	109	108			109				109							
計	1,394	1,279	1,018		8	662	22	7	14	343	4	6	77	28	70	232	13

数字は何れも村数を示す

*は給粕

島の三郡については、米・雑穀類は八〇％未満、農産加工が所謂米作地帯より稍高い比率をもち、中間地帯とも目されようが、信楽谷を中心とする甲賀や神崎郡の茶業は、幕末の開港後急速に普及したもの、「高島ちやみ」に代表される同地の織物も明治以後急速に發展したと思われるので、いずれも江戸期には自給的性格が強かったと思われる。

試みに明治一四年に刊行された「滋賀県物産誌」⁽³⁹⁾に網羅されている同県下各村の施用肥料の記載を機械的に拾いあげて集計したのが第一四表である。この種の資料では、量的把握によって利用の深度が測定できないから、どこまで魚肥利用の実態を示すものか甚だ頼りないが、全県規模でみた場合、西浅井郡全村（一九九カ村）を含めて肥料の記載を欠く村は全体の一割で、残りの九割一二七九カ村中の七九・五％が魚肥を利用していたことが判明する。その他の肥料としては、記載浅れの多いと思われる人糞・厩肥・刈草等々の自給肥料以外に、同県下のほぼ全域に亘って作付けされた菜種を原料とする油粕、甲賀・高島郡を主産地とする石灰の併用が比較的多いことが特色として挙げられる。また郡単位でみた場合、滋賀郡内に魚肥の記載が殆ど

みられないこと、高島郡は略全村に亘って鯉・油粕・石灰の併用を画的に記載していること、魚肥普及地域は必ずしも米作地帯に限定されないことが結論づけられると思う。

敦賀から搬入される魚肥の一部が湖東以外の湖北へも流入している事実を認めつつ、当面宝暦以降文化年間まで魚肥相場を書残した湖東の米作地帯の一農村鏡村周辺の魚肥需要の事情を断片的な村方史料から若干の見通しを探ってみよう。

天保一〇年一二月、鏡村の庄屋日記に次のような廻状の写が見出される。

廻章ヲ以得御意候、甚寒之節御座候処、各様方弥以御壮栄奉珍賀候、然は当年過急ニ米直段下落ニ相成候処、諸事買物米価ニ不相当ニ有之候、且耕作第一之肥シ鯉白子干^(鱈カ)之代銀米価ニ不相当高直ニ御座候間、百姓方一向引合不申、依之先式三ヶ年も素植ニ可致害ニ隣郷一同申合候ニ付不得止事、当八日ニ八幡町ニおゐて組々年番集會仕候、

八幡廻組 常楽寺組 二保組 中小森組 上郡組 武佐組

右丈ケ申合

鯉売箇米六斗かへ 白子一箇右同断 干^(鱈カ)一箇右同断

右之直段くらいならは買求可申候、米価ニ不相当ならは素植ニ可致害申合候事、尤富家之仁は抜々ニも買求度族も有之、左候而ハ一同之示合も出来不申候間、村方ニ而御示シ被成下、一統同様ニ相成候様村々御取極メ被成下候、以上、

右之一条、此間八幡町ニおゐて治定仕候間、当助郷最寄丈ケ申達候間、兼而御含情ニ御申聞セ可被成下候、為其

如此御座候、以上

(天保一〇)
亥十二月九日

助郷
武佐宿
会所

西宿村・上田村・馬淵村・鏡村・千束村・倉橋部村・岩倉村・長福寺村・

下平木村・下羽田村・上羽田村・今在家村・中野村・金屋村

右村々御役人衆中

幕末の史料ではあるが、当時の同地方における魚肥の利用が村々の共同体規制の下に行われていたことを窺わせるものである。しかも前にみた同地方の干鰯商仲間が、広い範囲で横への連携を強く維持していたのと共通の特徴をもっている。では富農層に限らず同地方に一般化された魚肥の施用が、現実に稲作生産力の向上にどのような形で結びついていたのであろうか。同じく鏡村の文化一五年の願書⁽⁴⁾を引用して同時期の農村の経済状態を探ってみよう。

一 鏡村之儀先年々困窮之村方ニ御座候而前々々数度厚以御憐愍御救被成下、是迄仮成ニ取続仕一統難有仕合奉存候、乍併元来当村之儀五十年前とは家数三拾軒計も相減御座候ニ付前々々年々御年貢不納仕候もの共御座候得共、大体之処は組々之内ニ而借り入等仕相凌罷在、既善右衛門・九左衛門庄屋相勤罷在候砌も拾三貫目余村借金有之候ニ付、其節も貳百石余之荒高十ヶ年間御用捨被為成下候様之御願も奉申上候得共御聞濟も不被為下置、其後少々宛借財方相増候上、去ル戌年以來三ヶ度之大洪水御座候而、其節は結構ニ御用捨被為成下、難在奉存候、乍去彼是村惑多一統難済仕候ニ付無換借り入仕候義ニ御座候得は年々借金方弥増、當時ニ而は五拾四貫目余ニも相成、利足計五貫目余ニ、其上頼母子空掛等多、近来ハ村免八ツ式歩ニ相成、其上年内式季ニ高老石ニ四匁余取立、都合九ツ免ニも相成候儀ニ御座候得は、別而近年砂入開発仕候御田地は勿論都而べと入ニ相成、至而米上リ

悪敷難渋之百姓ニ而肥物等も相減、野末御田地耕作行届不申、追々宛下ケニ相成候得共、当時之任難渋、小作之者共奉公又は其日持ニ罷出候得共、村方ニ而可仕様も無御座、惣潰ニも相成、下地人少之村方何共歎ケ敷奉存候
(後略)

村の窮状を訴え、向五カ年間五〇石の御用捨米を歎願したこの願書は、村民の退転が村内ニ手余り地を増大させ、村請制による年貢の負担を過重なものとし、借金と高免の重圧にあえぐ農民の姿を描き出している。このような村方の窮乏が何時頃から始まったかは知り得ないが、五〇年以前(明和頃)より家数三〇軒を減じたと述べており、当時の家数の記録はないが、延享三年の村明細帳には家数一〇三軒を数えているから、願出当時七〇軒余と推定される

第15表 鏡村持高構成
(文化12年)

40石以上	1戸
30 ~ 40	2
20 ~ 30	3
10 ~ 20	11
5 ~ 10	30
1 ~ 5	47
1石以下	13
計	107

なつて村民にのしかかっていたわけである。明治一年現在五九石九斗余の産額を記録している裏作の菜種生産については、江戸期の資料的裏付けが見出せないため、魚肥購入資金源としての位置づけを検討し得ないが、主穀生産への村共同体規制を伴った魚肥投入の必然性は、如上の村情に裏付けられて進行していったものと理解され得ると思う。安永頃、鏡村のうち東組の未進百姓三人の持高合計一二石五斗余に對し、累積した負債は利米分を含めて二八石四斗余に及び、組中で右田地を賄い難く、向一五カ年の免相を二割に引下げられたき旨を訴え出た願書には、未進百姓の一人喜左衛門の二反余の田地に投入した干鰯代銀の滞りが六〇匁余であることに言及している。

(42)

村内・村外の有力農民（或いは商人）の負担において調達される年貢の先納は、それら先納金主をして領主の収奪の代行者乃至領主・農民双方に対する金利取得者として存在させた。⁽⁴⁾ 収穫米を引当てとして延べ売りの形の販売を常態とする魚肥商兼在村米商人の位置づけも自ら想定される。

年次の記載はないが、天明頃と覚しき鏡村を含めて近隣一〇カ村の庄屋中が調印した申合書の一項に、つぎのような条項が設けられている。

在廻り商人田畑其所にて作物にて為替商致候義も有之候、已後右駄の義相頭候ハ、何れ之村之商人たりとも其村へ致通達、作物の品々取上作人え相渡申候間、商人有之候村々にてハ別而得と御申付可被成事

同地方の魚肥の施用は、農民層の分化による貧農の増加や年貢の上層農民への負担加重を伴ないつつ、それへの対応策として、村落単位での金肥使用の強制による利足分を加えた年貢米を確保するに足る米穀生産力の維持が村落連合という規模での共同体的規制に裏付けられて行なわれたものであった側面を物語っているといえるかと思われる。先述の湖東五郡の干鰯屋仲間のアウトサイダー抑止の意図も、そのような事情のなかで意味づけられるであろう。

註

(1) 『大阪市史』第五卷五八九頁

(2) 本書は寛政年間、三町干魚塩魚問屋仲間内部に起った紛議中、問屋の一人新鰻町小高屋次郎左衛門が草したものとして推定される。

(3) 「大阪肥物商組合一班」には、同組合最古の帳簿として、承応二年正月「戎講日記」の現存することを記し、四人組二〇名の人名のみを載せている。

(4) 史料館所蔵「大阪干鰯商仲間記録」による。『大阪市史』

の干鰯商仲間に関する記述とは異同があるが、同書の依拠された「大阪肥物商組合一班」は明治二三年に同組合が編纂したもので、「一班」に用いられた原史料「大坂干鰯商仲間記録」によってみると、仲間人数測定のため材料となったと思われる仲間の調印帳には、後年の加入と思われる組合員の署名分をも考慮せず計上された形跡がある。ただし、表下欄にも註した通り、該人数は新鰻町組のみ的人数と解せられ、他に新天満町組が存在したことが仲間の厘引銀徴集の記事から推測される。また以後分裂・合一を繰り返し

た同組合の人数を正確に把握することは困難である。

(5) 脇田修『近世封建社会の経済構造』三一九—二〇頁

(6) 大阪千鰯商仲間記録「会谈要録」(史料館所蔵)

(7) 同右

(8) 荒井英次『近世日本漁村史の研究』四八八頁

(9) 伊東弥之助『江戸の千鰯と柏市場』(三田学会雑誌三五の一一)

(10) 寛保二年堺表から出された大和川筋龜瀬迄・石川筋喜志村迄を通行する平田船百艘免許の出願に対し、剣先船の既得権を侵害するものとして反対する願書の連名には、剣先船関係者の他に大坂の千鰯商が加わっており、それによると千鰯古問屋・同古中買・千鰯問屋・千鰯中買問屋之中買、千鰯買次問屋と区別されている。

(11) 『滋賀県八幡町史』下巻三八三頁

(12) 同右、三八七頁

(13) 「湖東江頭組肥物仲間記録之享」(玉尾家文書)、『八幡町史』下巻三八九—九〇頁にも八幡町苗村家文書の同定書が収録されているが、若干誤植が認められる。

(14) 『八幡町史』下巻三九二—三頁、なお、この時の株仲間の出願は、審理中間もなく株仲間解散令によって実現されないうちに終わった。

(15) 弘化三年愛知郡唯一一人の参加人池庄村米屋嘉兵衛の脱退によって江州五郡肥物屋仲間となる(『八幡町史』上巻六

八九頁)

(16) 古島敏雄『日本農業技術史』下巻五九四頁

(17) 小野正雄「寛文期における中継商業都市の構造」(歴史学研究二四八号)

(18) 小野正雄氏の整理によれば、敦賀入津米の推移は、七六万俵の入津米をみた寛文四年のピークを中にはさんで、入津米量が六〇万俵台を堅持する承応—寛文の時期、六〇万俵から一五万俵へ急減する延宝—元禄期、ほぼ一五万俵の線を中心として横ばいを続ける宝永以降の三期に分けられるが、享保以降の入津米量については、後掲図表参照。

(19) 小野氏前掲論文

(20) 天野久一郎『敦賀経済発達史』二八〇頁

(21) 『八幡町史』上巻四九二頁

(22) 同右、四九八頁。なお、この推測の根拠として、次の史料が挙げられる(同書下巻二五三頁)。

一 蝦夷地の内六十一ヶ所家中給分代ニ渡し置場所所有之候得共、夷人より収納無之、銘々より夷人に向候品を船積にて差越、雑物替いたし申候て、其利金取申計のよし、併近年出物蝦夷地不漁ゆへに少く船数を遣し候へ共、損毛計出来申候故、家中申合少々宛寄合船にて差遣申候、尤商人船に運上を取り、其場所相渡し申も有之候、依之近年家中困難のよし(享保二年「松前蝦夷記」)

(23) 『新撰北海道史』第二卷一七二—一七五頁による。

(24) 北陸の鰯漁場に関する知識は乏しいが、後掲の敦賀相場表にみられる干鰯類のうち、油物干鰯の産地は主として越後地方であつたと思われ、その産額の規模も詳かでないが、北前船盛行以前は加賀・敦賀等の地方的市場を対象としていたのではないかと思われる。なお大坂相場のうち、北陸の糸魚川物が現われるのは寛政七年以後である。

(25) 「大阪肥物商組合一班」二の下

(26) 寛政二年の物価調査の際の大坂干鰯商仲間の答申には、干鰯騰貴の原因として上記の件につき長文に亘る説明がある。

(27) 「大阪干鰯商仲間記録」のうち。

(28) 『八幡町史』下巻三一八頁。このほかにも、降つて宝暦十二年十一月の両浜組中の掟に「従先年相定置候通、組中印々敦賀中買宿え荷物指送候事堅停止ニ相極置候」という条文がある。なお両浜商人とは、異説もあるが、柳川・薩摩両村を合わせて一浜とし、八幡町を合わせて両浜組と称したと云われる(『新撰北海道史』第二卷一一七頁)。該史料の三ヶ所商人はこの両浜商人であらう。

(29) 『八幡町史』(下巻二五三頁)には天明六年の調査として、次の史料を載せている。宝暦一二年の松前藩の御用金を拝命した両浜商人の人数と比較して(『新撰北海道史』第二卷一一八頁)、かなりの減員が窺われる。

他国より罷越蝦夷地交易仕候名前書付

近世近江地方の魚肥流入事情(鶴岡)

江戸鉄砲洲船村町二丁目

同 本材木町二丁目

飛騨国益田郡湯島村

紀伊国有田郡栖原村

近江国愛知郡柳川村

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

新宮屋久右衛門

小林屋 宗九郎

久 兵 衛

角 兵 衛

材木屋七郎右衛門

浜屋与三右衛門

福島屋 新 助

木屋 四郎兵衛

天満屋専右衛門

天満屋 甚兵衛

恵比須屋弥三次

住吉屋伝右衛門

近江屋市左衛門

菜 屋 伝兵衛

山城屋長左衛門

熊野屋新右衛門

ノ十七人

右は他国より松前へ出店を構へ、支配人と唱下代を遣置候。蝦夷地之内銘々場所を引請け、迎上屋と唱、番小屋を建、是へも支配人を差遣し置き、年限に彼地交易仕候者共書面之通御座候、以上

(30) 「万相場日記」(玉尾家文書)

(31) 湖北の伊香・浅井両郡の干鰯屋中は、安政六年湖東の五

郡肥物仲間へ金五〇兩の加入料を納めて仲間入りしている

(31) 『八幡町史』下巻三九七頁

(32) 『万相場日記』(玉尾家文書)

(33) 『明治前期産業發達史資料』第2集七七八頁

(34) 宮下正司「松前藩と若越交通」『日本海海運史の研究』

(35) 入津石数二万一千石余という数字は、「報文」の前出「輸出入表」の数量による。すなわち上掲の数字から一石二個・二本で換算。

鯉	25,937個
白子	14,149本
メ柏	1,699本
笹目	229本
不撰子	11本
計	42,025

(36) 山口和雄『明治前期經濟の分析』二五四―五頁

(37) 稿了後、中井信彦氏から「田作こえ」は「いわしこえ」すなわち干鰯と解する方が適當ではないかとご指摘をうけた。指摘されてみると田作Ⅱ稲作と解釈するには聊か飛躍があり過ぎたことを認めることに答ではないが、明治一年の所謂米作地帯の水田化率は上掲の通りで(甲斐英男氏後出論文第四表より)、稲作

郡名	水田化率
賀太	87.0%
栗洲	90.3
野生	80.7
蒲知	90.1
愛上	92.0
犬	87.3

があり過ぎたことを認めることに答ではないが、明治一年の所謂米作地帯の水田化率は上掲の通りで(甲斐英男氏後出論文第四表より)、稲作

への魚肥の投与が主体であったと考えられてよからうと思ふ。

(38) 甲斐英男「明治一〇年代の經濟構造とその変化」(史学研究一〇六号)

(39) 『滋賀県市町村沿革史』第五卷

(40) 竜王町鏡区有文書

(41) 同右(該区有文書のうち、江戸期の庄屋日記は同区のご理解あるご高配をうけ、当館に於て全冊マイクロ・フィルムに収録してある。)

(42) 該表でみると、同時期の鏡村には、水吞は一軒も存在しないことになる。潰百姓の跡作には、五人組・親類が責任を負わされるか、入百姓等によって相続する形がとられているが、この種の資料による階層分化の検出には限界が存することを指摘しておきたい。

(43) 『滋賀県市町村沿革史』第五卷、鏡村の項

(44) 小大名領における年貢先納の実態については、越後系魚川領について考察を試みたことがある(拙稿「近世後期における一万石大名領陣屋町の經濟的機能」史料館研究紀要一号)。その事例は可成り一般化され得ると思っている。

史料「万相場日記」抄

(1) 大阪魚肥相場について

大坂における魚肥の集荷圈については、前文で概観した。その集荷圈の広さに反映して、大坂問屋の報知する魚肥相場の品目は、敦賀相場に比較して産地と品目の銘柄の記載が詳細であり、多種類に亘っているが、一部を除き価格の単位となる重量の表示がない。概して鯡肥（鯡・笹目・数子・身欠等）とメ粕（油取）類は一〇貫目単位、干鰯類は桶のち一俵を単位として表示されているようであるが、魚肥の種類により、また時期によっても重量の単位に異なるように見受けられる。従って機械的にこれを数表化することは甚だ困難であったため、原文のまゝ、紹介して、大方のご教示を仰ぎたい。

ただ価格表示に重量・容量の単位を欠くことは、該資料紹介の意味がなくなるので、若干知り得たことを補足し、相場書中、前後の数値から疑問が感じられる価格については、重量の単位を考慮する必要があることを指摘しておきたい。

文政三年の松前肥物取引仕法に関する仲間の調印帳によれば、諸メ糟・白子・鯀鯨・身欠の俵の規格には大・中・小の三種があり、大は皆掛二五貫以下、中は同一六貫以下、小は同一一貫以下と分類されている。また干鰯については見地桶五盃以上と以下で歩引率に区別がある。この見地桶の容量については明確な規格を示した資料を見出せないが、寛政三年の物価調査の際の書上げに、升目一斗を単位に、天明八年上魚式匁五分から八分、中魚式匁二分から四分、下魚匁七分から式匁と記しており、本相場書同年の数値とはほぼ近似した数字を示していることから、一桶⁽²⁾見地桶の規格は一斗であったと推量される。見地桶五盃を一俵の標準とすれば、一俵⁽¹⁾五斗、一石⁽²⁾四〇貫として一俵の重量は平均約二〇貫目程となる。以上は松前物及び奥州物（南部・津軽・八戸辺）の規格を示すものと思われるが、関東・西国物干鰯については、「肥物商組合一班」に収録された寛政元年十一月の問屋・仲買の連印議定書に注されたメモによると、大俵一六⁽¹⁾二〇貫目・中俵一〇⁽¹⁾一六貫目、小俵三⁽¹⁾四貫

目となっており、本相場書の寛政六年の房州・越後物の表示によっても知られるように、俵の規格には産地によつて可成り相違があったことが認められる。⁽³⁾

魚肥の銘柄については専門的知識を欠くため触れ得ないが、明和二年―天明元年の間に散見される「長堀・幸町・堀江」の町名については、寛政二年の仲間の上申中に「私共市売仕候干鰯買受候仲買共日々永代浜入船ノ荷物并ニ蔵入荷物人数見積、増減多少相考直段相立買取候処、右永代浜ヲ取放シ、堀江長堀道頓堀木津川安治川辺其外浜々ニ罷在候船宿小宿上荷宿成ハ他商売人共積船ノ船頭水主等ノ縁ニ随ヒ干鰯荷物引受蔵入仕、勿論市場ヨリ永代浜限候故市売ハ不仕候得共、内証ニ而売買仕候義追々増張仕」と端売荷物の増加にふれ、その禁止を願つており、前文にも触れた脇浜であつたことが判る。なお、一時的にはあれ大坂間屋がこの脇浜の相場を地方の顧客に報知していることは、幕末まで株立てされることのなかつた同地の干鰯商仲間の性格を窺う上で興味のあるところである。

最後に報知人については、大坂干鰯商仲間記録の中に、つぎのような印形帳が見出される。

覚

一当鰯干鰯商売之儀は住古々仕来之通問屋仲買之無差別売買致し来候事、然ル所、我々此度十軒申合セ、東西え客方相頼問屋職出情仕、以後荷物引請客方え売付之節は相互ニ相談之上随分如無之様ニ相働キ可申候事

一客方え送り荷物又は此方買付荷物海上ニ而万一差支之義有之候は、縦横合荷物無之候共相互ニ早速立合相談之上取計可仕候事
一此以後右十軒之外問屋職御望之事有之候は相談之上加入可仕候事

右之通相談之上諸事相究候上は急度相守可申候、万一心得違被致候仁ハ重而申合セ相除可申候、以上

安永六年酉正月

和泉屋八右衛門

近江屋平右衛門

和泉屋 勘兵衛

報知人が、この十軒問屋の一員であったことが知られる。⁽¹⁾
増加の傾向と無関係ではなかったであろうと推測される。

なお、相場書には宛書の記載がないが、天明二年から「大津桶」、寛政十一年から「大津掛り物」の記載がみられることは、大津問屋を経由することを意味するののか、或いはこの相場書が米相場同様、大津問屋へ宛てた報知であったか、その決め手を欠くが、大津問屋の価格形成の上で果す位置を窺う材料となろう。

註

(1) 「大坂干鰯商仲間記録」のうち、なお、この時の規定書は『新撰北海道史』第二卷五〇七―八頁に収録をされている。

(2) 寛政八年の相場書に「新枰」と断っており、この時期に計り桶の更改が行われたことを窺わせるが、見地桶の更改であったか否かは、今のところ裏付けの史料は見出せない。

(3) 各産地での干鰯の斗り桶については紹介された事例は乏

しいが、下総国海上郡足川村の享和―文政時に一俵は二斗六升枰で三盃から三盃五合入、すなわち七斗八升から七斗八升五合入とされており(山口和雄『九十九里旧地曳網漁業』二七七頁)、輸送中の目べりを考慮に入れても、問屋商人の中間利潤の源泉が依直しの過程に存したことが察知される。

(4) この中、生平・佃五・尼市の三名は塩魚問屋株を有する。

鷺屋 忠右衛門^①
生貝屋平左衛門^②
佃屋 五兵衛^③
尼屋 市兵衛^④
吹田屋六右衛門^⑤
虎屋 喜兵衛^⑥
鍋屋 五左衛門^⑦

宝曆九年 初相庭

一 銚子外川赤大こし長

中こし長共

三匁五六分々

三匁貳三分

一字和佐伯薄赤大こし長

中こし長共

三匁貳三分々三匁

一日向白中大こし長

中こし長共

三匁貳三分々

貳匁八九分桶

右之通初売買御座候、諸方寒漁相聞へ不申候処、漸閑東表出方斗漁事御座候故、人氣能、急入用筋へ景氣能買取候、此後漁事次第高下御座候へ共、当分緩々相見へ不申候、思召御用御座候ハ、仰被下度奉頼上候、相替義御座候ハ、永日寛申上へく候、以上

正月五日

鷺屋忠右衛門

一 銚子外川赤中越長

大こし長共

三匁八九分 三匁六七分

一 阿波薄赤大越長

三匁貳三分

一 土佐日向薄赤大越長

中こし長白口共

三匁貳三分 三匁 貳匁八九分

一字和佐伯同じ魚筋

右同断

一千粕鷹屋三拾八匁五分

次三十六匁 四五匁 貳三匁

下粕 三十一匁くらい

右之通御座候、干か之義閑東もの次第ニ無数相成候得ハ、右相場ニて能捌進キ申候、西国物少々つ、後船候由、殊ニ字和佐伯少々漁事仕候由、閑東物故合より下直之方ニ相見へ申候、干粕之義種粕高直故望取乍高直能捌進キ申候、思召寄被仰付可被下候、尚相替義重便

可申上候、恐々謹言

(宝曆九)
三月五日

いつミヤ勘兵衛

代小兵衛

宝曆拾庚辰年

一銚子外川薄赤中大越長

貳匁六七分桶々貳匁六分

一九十九里薄赤中大越永 中小こし長

貳匁八九分桶 貳匁六七分

一字和佐伯薄赤中大こし長

中小こし長白口とも

貳匁八分桶々貳匁四五分

一佐伯中羽碎十メ匁ニ付

廿匁々十八九匁

一千粕たかや

三十一匁五分

なんばや卅匁 次廿九匁 廿七八匁

下廿五六匁

中国正 四十三匁四五分

近世近江地方の魚肥流入事情(鶴岡)

金せに

六十一匁九分五厘

十五匁三分

大坂泉勘

正月五日

粕干か相庭

一丁子外河油取拾メ目

廿一匁々十七八匁迄

一西国むろ油取同断 砂なし

廿匁々十八九分

一夏引赤大こし長 中小こし長

貳匁七八分桶

一丁子外河秋引中こし長

小こし長

老匁老貳分桶 貳匁

老匁八九分桶

一千粕たかや 廿七匁五分

廿五匁五分 廿三四匁

廿一貳匁 下粕廿匁まで

ノ十一月五日 大坂泉勘

宝曆拾二壬午年

一字和佐伯薄赤中こし長

白小満共

貳匁三四分桶貳匁

老匁八九分

一日向薄赤大こし長

中こし長白口共

貳匁七分ノ二匁貳三分

一千粕たかや 貳拾五匁

廿三匁 廿老貳匁 廿匁

下十八九匁迄

一筑前米 正五十五六匁

一金せに 六十貳匁貳分

十五匁貳分

一水油 貳百廿八匁

右之通祝義初売買仕候、関東寒引漁事義旧冬十六七日

三十万計有之候由、廿六日被申来候、冬漁事承先々大悦仕候

正月五日 大坂泉勘

明和二乙酉年

大坂わしや

一銚子外川南部油取

三十六七匁ノ段々三十貳三匁

廿八九匁

老ノ匁ニ付貳匁貳三分目

一房州銚子冬引

大こし長中こし長共

三匁六七分ノ段々

三匁貳三分

一千粕たかや 三十四匁

一同 長堀幸町堀江

三十匁

廿九匁 廿八匁四五分

右之通初売買御座候、関東表寒引相応ニ漁事仕候、凡

三四拾万計有之由、□□駝と相知不申候、魚品悪敷御座候へ共、先近頃之漁事ニ御座候、段々入船仕候ハ、能買向可有之存候

メ わしや忠右衛門

明和三丙戌年

一うハさいき薄赤大こし長

中こし長

三匁三四分 貳匁八九分

一日向白うと

三匁壹貳分 貳匁七八分

一千粕たかや 三十六匁五分

次三十三匁 貳三匁

三十匁

一肥後米 六十五匁三分

一筑前米 六十四匁六分

一かゝ米 六十匁六分

一岡大豆 七十八匁五分

一種油 四百五十匁

近世近江地方の魚肥流入事情（鶴岡）

一水油 三百六十八匁

一金せに 六十三匁四分
十五匁七八厘

メ正月五日 大坂泉勘

明和五戊子年

一鹿嶋九十九里

薄赤中大こし長中こし長

三匁三四分桶 貳匁八九分

一五嶋平戸中物

三匁貳三分 三匁

一千粕たかや三十七匁

次三十四匁 三十貳匁

下粕三十匁くらい

一種粕 四百六十匁

一水油 貳百七十三匁

一金せに 六十三匁六分

十五匁貳分

メ正月 大坂泉勘

明和七庚寅年

一 薄赤中目 三匁貳三分₆
三匁四五分桶

一字和佐伯薄赤中大こし長

三匁貳三分 三匁四五分迄

一 油取 貳匁八九分目

一本たかや 三十七匁五分

一 たか利 三十四匁

次 三十一匁

一 水油 三百卅二匁

一 種粕 四百廿五匁

一金せに 六十四匁六分
十四匁貳分五厘

一 正筑前米 六十八匁八分

一 正月五日 大坂泉勘

一 日向油取十匁廿貳三匁かへ

一 鯿十匁十四匁位

但シ固ニ巻ノ引有

一 八月廿四日 泉勘

明和九壬辰年

一字和佐伯白薄赤

大こし長中小し長小ま共

三匁壹貳分 三匁

貳匁六七分桶

一千粕たかや廿九匁五分

たかや利兵衛藤兵衛庄助右之新分

廿六匁五分 外物廿三匁五分

廿貳匁五分 貳十貳匁

一大坂水油 貳百七十七匁

一 種かす 三百六十五匁

一 鯿 十六匁五分
十六匁

一 中国 五十五匁三分

一金せに 六十八匁四分五厘
十三匁五厘

一 正月五日 大坂泉勘

安永四乙未年

大坂千鶴相庭之事

一 佐伯こし長

老奴八九分 貳匁桶

一土佐こし長 貳匁四五分

一日向こし長 老奴八九分 貳匁

一長崎 老奴八九分 貳匁

一南部油取 拾メ目

三十貳三匁 四五匁

一鮪取 十六匁五分 六匁

一さゝめ 十二匁五分 三匁

一干粕 馬利廿六匁五分 七匁

一堀江長堀幸町 廿貳匁七八分

一水油 三百十七匁

一筑せん正 六十一匁五分

一金せに 六十匁五分

十貳匁七八分

メ 正月初うりかい 大坂

安永五丙申年

一字和佐伯 三匁老貳分

薄赤中こし長 貳匁七八分桶

近世近江地方の魚肥流入事情（鶴岡）

一因幡赤大こし永 三匁老貳分

中こし永 貳匁七八分

一鰯油取 十メ匁付 廿一貳匁十八匁迄

一鮪油取 十七匁五分十八匁迄

一鯿笹め 十七匁十八匁迄

一千粕本家たかや 三十匁三五分

一同外たかや 貳十七匁三五分 廿七匁

一堀江幸町 廿五匁廿貳三匁迄

一金せに 五十九匁五分

十一匁五分七八厘

一中国米 四十七匁四分

帳合引方四十七匁三分

右之通初うりかい仕候

大坂わしや忠右衛門

安永六丁酉年

一鹿嶋 九十九里中こし長小こし長

貳匁四五分桶

一右同所中大こし長明よし

三匁貳三分 三匁一貳分桶

一関東鰯粕 十匁廿四匁

一平戸中羽薄赤明よし

三匁貳三分 三匁一貳分桶

一佐伯くたけ 十匁 廿一匁

一鰯粕十匁 廿匁

一にしん笹目 十七匁六七分

十四匁五七分

一千粕堀へ幸町 廿七匁五分 廿六匁五分

一同たかや 三十一匁

一油 貳百九十匁

五十九匁六分五厘

一金せに 十匁九分

一肥後米 六十五匁六分

メ正月五日 大坂わしや忠右衛門

安永七戊戌年

大坂初相庭之事

一房脇薄赤大越長

一九十九里 同断

一鹿嶋 同断

三匁八九分 四匁桶

一同所中こし長小尺

三匁貳三分桶

一同所油取拾匁

廿三四匁 五匁

一鰯粕拾匁

十八匁五分 十九匁五分

一にしん笹目十七匁七八分

十四匁五六分

一めきれ 十六匁貳三分

一千粕脇鷹や

廿九匁 八匁五分

一同次粕 廿五匁 四五分

メわし忠

大坂下直之事

一古にしん 十四匁 三匁九分

一房州赤大こし長

式匁壹貳分

一九十九り中こし長

壹匁八九分 貳匁

一かしま こま 新引 壹匁三四分

(安永七) 九月五日 いつミヤ

安永九庚子年

一房弱薄赤大越長中越長

貳匁七八分 五六分桶

一九十九里白薄赤大中越長

貳匁四五分 壹貳分桶

一佐伯碎上明吉

十匁匁十八九匁かへ

一にしん 十六匁

一さゝめ 十貳匁三四分

一たかや粕 廿貳匁八分

一堀江幸町 十八匁七八九分

一荏油 三百十匁

一水油 貳百四十六匁

一金せに

六十一匁五厘
九匁七分五厘

メ 正月五日 大坂わしや

天明二壬寅年

一房州白越長 江弱桶貳匁七分かへ

一さんま粕 拾匁匁

拾九匁 廿匁

一鯿 十五匁かへ

一さゝめ 十一匁貳三分

一たかや粕 廿五匁五分

一大正味 廿三匁

一中正味 廿一匁

一水油 貳百五十三五匁

一岡大豆 五十四匁

一肥後粕 五十六匁壹分

一金せに 五十九匁四分五厘

九匁貳分五厘

ノ 初市相場也 大坂泉や惣治郎

正月五日

(天明八戊申年初相場)

一関東白中越長

貳匁五六分ノ三匁桶

一番上 十メ 三拾匁かへ

一佐伯赤中羽十メ 廿五匁

一鯿 貳拾四匁

一笹目 拾九匁

一教子 三拾四五匁

一たかや干粕 五拾匁

一大正味 四十六匁五分

一種粕 五百八拾匁

一荏粕 五百七拾匁

一塩嶋 三斗五升

一金せに 五十五匁貳分八厘
九匁九分一厘

ノ 大坂 和泉や勘

寛政二庚戌年

一関東九十九里白中越長

壹匁七八分ノ貳匁桶

一同所さんま取 十メメ廿六匁

一鮪取 十メ匁 廿九匁

一鱒取 " 廿三匁五分

一佐伯中羽取同 三十壹匁

一笹目 十七匁五分

一鯿 廿貳匁五分

一鮭 廿貳匁

一ほつけ 廿壹匁五分

一大正ミ干粕 三拾三匁

一地種粕 五百四十五匁

一枇粕 五百拾五匁

一荏粕 五百目

一水油 三百五拾三匁

一肥後正米 五十五匁七分

帳合 五匁八分 六匁壹分

一岡大豆 五拾八匁五分

一金せに 五十五匁三分五厘
九匁五分七厘

正月五日 大坂和泉屋勘兵衛

寛政六甲寅年

一房州冬引薄赤越長五盃入

目方六匁以上 拾匁五分

一同所上油

九匁五百々十匁 拾五匁五分

一同所番上

九匁六八匁入 廿三匁

一越後上油

七、八匁入 拾三匁

一鯉羽外 廿壹匁

一種粕 五百拾匁

一荏粕 四百八拾五匁

一嶋塩 貳斗四升

一灘之外 壹斗四升五合

一水油 三百五十五匁

一金錢 六拾匁
九匁四分貳厘

一筑前米 六十四匁五分

一同帳合 六拾三匁三五分

大坂越年米 百七拾九万五千九拾俵

正月五日 大坂和泉勘

寛政七乙卯年

一関東白中越長 五盃入拾匁

一同所番上粕 九匁六匁入
廿貳匁

一平戸白中羽 五はい 九匁

一糸魚川油物 七匁五八匁

一十貳匁五分

一走鯉 廿匁

一外割 十九匁六分

一笹目 十五匁八分

一 数子

三十式匁

一 種粕

四百七十式匁

一 荏粕

四百七十匁

一 大正干粕

廿九匁

一 鷹屋粕

三十式匁

一 水油

三百卅五匁

一 金せに

六拾匁三分

九匁四分七八厘

× 正月五日

大坂相場

寛政八丙辰年

九十九里

一 上々油物

新 榼

三匁桶

一 番上粕

九×六八百

廿四匁

山出し

一 数子

三拾壹匁五分

一 走り鯡

廿式匁五八分

一 種粕

四百八拾五匁

一 嶋塩

式斗三升

一 金せに

六拾匁五分

九匁六分四厘

× 正月四日

大坂亀勘

寛政九丁巳年

一 越後油物

新舂

式匁七分

一 関東さんま取

九×六引

式匁四五分

一 走鯡

廿五匁

一 笹目

拾六匁位

一 数子

三拾壹匁

一 種粕

四百七拾匁

一 干粕

廿九匁五分

一 同たかや

三十四匁

一 嶋塩

式斗五升八分

一 なた塩

一斗式升三合

一 水油

三百六十六匁

一金せに 六十一匁五厘
九匁五分五厘

メ 正月五日 大坂初相場

寛政十戊午年

一関東上油物 目方七メ 拾貳匁五分

一同所番上メ粕 九メ五六

廿貳匁五八分

一越後上油物 九メ六十メ

拾三匁五分

一佐伯つゞき 十メ

赤いわし 拾五匁六廿匁

一東鯡 廿壹匁五分

右初商内少々仕候得共跡調かね申候

一笹め 拾六匁

一大正味干粕 廿七匁五分

一同たかや 三拾壹匁五分

一種粕 四百三拾匁

一水油 貳百九十三匁

一荏かす 大津着 五百拾匁

一金せに 六十一匁六厘
九匁貳分

メ 正月四日 大坂相場

寛政十一巳未年

一関東上々油 五盃入

十貳匁五分位

一同 中羽 六匁五分六九匁迄

一同 番上取 廿匁位

大津掛り物貳匁貳分

一いと井川油物 拾壹匁位

一走り鯡 廿貳匁位

一なみ粕 四百三拾匁位

一同荏粕 四百四十五匁

一千粕 廿六匁位

一高屋粕 三拾壹匁

一金せに 六拾貳匁七八厘

九匁四分三五厘

正月四日 大坂亀勘

(寛政一二)
正月五日

大坂

わしや松治郎

寛政十二庚申年

一 関東上油干加 五盃入拾貳匁五分
一 同 中物 十一匁拾匁
一 鰯粕九ノ五六百 拾九匁五分
一 鰯 貳貳匁
一 笹目 十六匁
一 高屋粕 三十一匁
一 荏粕 四百四十五匁
一 一種粕 四百三十匁
一 筑せん米 五十八匁六分
一 同 帳合 五十八匁壹分
一 正味粕 七匁八九分
一 正味粕 廿六匁
一 金せに 六十貳匁五分八厘
一 水あふら 九匁四分三四厘
一 越年米 三百八匁
一 越年米 百七十八万三百俵

一 関東大越長 五盃入
一 同所番上取 大坂ニて廿四匁三分
九ノ五六百匁 但し大津迄貳匁貳分掛り
越後薄赤
一 中越長 拾貳匁五分
一 鰯 廿五匁五分
一 笹目 廿匁
一 一種粕 四百七拾匁
一 荏粕 四百六拾五匁
一 高屋干粕 三拾七匁五分
一 同大正味 廿八匁五分

一水油 三百拾五匁

一金せに 六拾三匁五厘
九匁四分

一筑せん米 七拾貳匁

一帳合 六十九匁九匁七八分

一越年米 百五拾八万俵

メ 正月五日 和泉屋勘兵衛

享和元辛酉年

一房弱赤油物 五匁入

拾五匁位

一鯡 十メ 廿六匁位

一数子_下 十九メ大津入

六十五匁五分位

一たね油 四百九拾匁

一佳粕

一千粕 三十六匁

一同高屋 三十八匁五分

一金せに 六十一匁五分
九匁貳分

越年米 百八十万俵余

メ 正月五日 大坂泉勘

享和二壬戌年

一関東上油 十メ 十三匁

又貳匁大津入掛り物

一鯡 廿貳匁

一種粕 四百六拾匁

メ 正月五日 泉 勘

一鯡 大津着 廿貳匁五分

一_下数子 同五十八匁九

一番上取 同廿六匁

一卷塩 同九匁五六分

一千加類 入船なし

メ 正月廿七日 大坂わしや

享和三癸亥年

一房州番上メ粕 廿匁五分

式匁式分掛り物

一走り鯢 十九匁ハ式三分

一かやへ 十八匁四五分

一笹目 印物十四匁五七分

十三匁八九分

一鱒取 十八匁五十分

六十三匁四分

一金せに 九匁三分

正月四日 大坂亀屋勘兵衛

文化二乙丑年

一走鯢 十ハ大津入廿匁五分

一笹目 同 廿式匁五分

一数子 廿ハ 五十八匁

一白子 同 四十八匁五分

一番上ハ粕 廿三匁

一ます同 廿四匁

一関東油物 十三匁

一種粕 四百八拾匁

一高屋干粕 四拾匁

一金せに 六十三匁五分

九匁七分

正月四日 大坂泉甚

文化三丙寅年

一走鯢 廿ハ大津入 四十式匁

一笹目 十五ハ同断入十九匁五分

一白子 廿ハ同断入五拾匁ハ

四十七匁

一番上 大津入 廿三匁

一鱒取 〃 廿匁五分

一関東油物 拾三匁位

一高屋干粕 三十八匁五分

一岡大豆 六十匁

一筑せん米 五十五匁五分

一同 帳合 五十八匁三分

式分

一数子ハ下十九ハ大津入

五拾匁位

六十四匁九分

一金せに

八匁八分

メ 正月四日

大坂泉甚

文化四丁卯年

一 西国上油干加大津入拾三匁三五分

一片元巻塩 同入 六匁貳分

メ 三月廿五日 大坂平利

(文化四)

一走鯢 廿メ立大津入四十五匁位

一 笹目 十五メ立同断入廿七匁位

一 数子_下十九メ立同断入五十五匁

一 白子 廿メ立同断入五十六匁五分位

(2) 敦賀相場表について

敦賀仲買問屋と目される近江屋甚三郎・安田五郎右衛門・清水仁兵衛・角野市兵衛・加賀屋宗助等から寄せられた同地の相場書の品目は、時に精粗があつて必ずしも一定していないが、米・麦・魚肥を主体とし、時に粕類(荳粕・油粕)・石懸り物・小豆・銭相場等が散見される。また時間的変化としては、後掲の表を一瞥して明白な

一 関東上油五盃入六メ 十貳匁五八分位

一 嶋塩 大津入 八匁七八分

一 巻塩 同入 九匁三四分

メ 十月七日出 大坂泉甚

文化五戊辰年

一走鯢 廿メ立大津入 四十八匁五分

一 笹目 十五メ大津入 廿六匁

一 _下数子十九メ大津入五十五匁五分

一 関東干か 大津 拾三匁

一 番上メ粕 廿三匁五分

一 罇メ粕 廿三匁

メ 正月四日 大坂和泉屋甚兵衛

北国米大津入津高調 (天保14年)

加	州	米	12,000	俵余	但し文化14~文政6年間の平均
秋	田	米	9,000		" 文政3~天保3年間の平均 (2カ)
会	津	米	2,000		" 文政8~文政6年間の平均
出	羽新庄	米	20,000		" 文化11年頃
越	後新発田	米	20,000		" 文政5~同7年間の平均
越	後権谷	米	1,000		" 文政6年
越	前丸岡	米	1,000		" 文化14~文政3年間の平均
丹	後田辺	米	500		" 文政4年

『大津市史』下巻p.107より

ように、相場日記の始まった宝暦五年から天明中頃までの報知の頻度は高いが、天明末年以後は殆んど初相場の報知のみに止まり、文政初年だと切れてしまっている。冬期の就航が不可能であった北前船の入津は、十月頃が最終便であったと思われるから、前年入津の困い荷について初相場が建てられていたわけである。

米の銘柄については、上米・中米・下米、地米の区別があるが、産地名の記載は殆んどなく、この区別が何を基準とするかも不明である。本相場表に採択した上米については明和七年三月二七日付の古米に越後、安永四年六月一八日付に新川米と産地の名を冠してあるが、これが上米の銘柄を示すか否かは疑問である。

明和九年六月一六日付に唯一の敦賀上米の記載があり、或いは小浜藩の払い米を上米、地米は納屋米的なものを指称して区別されたようにも考えられるが、断定し難いので後考に譲る。明治一年の「采覧報文」に載せられた輸入米の記事によっても推察されるように、寛文の後年から減少の一端を辿った同地の入津米(後掲第一図参照)のうち、どれ程が地元需要に充てられ、どれ程が大津へ廻送されたかは、資料の上で確かめることは出来ない。ただ大津相場の銘柄に、小浜米を除き北国米が代表的な銘柄として登場しないことを指摘しておきたい。

天保一四年の調査によれば、敦賀・小浜を経由したと思われる大津への北国米入津高の凡三〇年間の平均は六万五、五〇〇俵⁽¹⁾で、当時の敦賀入津米高は不明であるが、その廻送されてくる産地と比重の凡そを推察する手掛りとなる。

米に比べて大豆に関しては、越後・最上・津輕・野辺地と産地名の記載があり、その他馬大豆・秋大豆の種類がある。そのうち比較的連年に亘って記載のある越後大豆を相場表に採用したが、同大豆の記載の見えぬ年のみ、適宜他の銘柄を補足しておいた。

魚肥については、松前・蝦夷地産の鯿肥と北国魚肥¹干鰯類に区別される。前者には、本表に採録した走り鯿（宝暦一四年六月三日付の報知に走り鯿と並んで「身欠付」直段が区別して記載してあり、明治以後胴鯿と呼ばれるものと同じと思われ、固鯿・束鯿の別がある）・笹目・数子・白子のほか、目切（のきれ）・身欠等が散見されたが省略した。なお数子は身欠等と共に、従来食用水産物として説明されているが、玉尾家の「相場日記」に見られる限り肥料と目され、恐らくそれらの粗悪品であったと思われる。数子のほか比較的多く散見される「不²子」²「不³撰子」は、「³下数子」と同種のもので数の子の一種と推測し、数の子の記載のない年次については不²子を以って補足した。

干鰯については、油物干鰯と秋引・冬引・後引と漁期の区別を附した干鰯に、のち⁴粕（鰯・鯿）が加わってくる。何れも産地の記載は稀で、宝暦一三年初相場・明和三年五月九日・明和四年八月一二日の三報知には酒田油物と注され、同地周辺からの移入の事実を認められるが、寛政五年九月一八日の加賀屋の報知には次のように記載されている。

- 一 鯿 十⁵目 廿⁶匁五分
- 一 鯿 拾九匁
- 一 ホッケ 同 事
- 一 越後上油 五⁷匁入拾貳匁五分
- 一 能代中物 八匁

一金六十式匁かへ

上油ノ柏 拾九匁五分

十貫目ニ付

一箱立 後引中油柏拾七匁五分
(寛政五)

ノ九月十八日 か、や

油物干鰯が、酒田周辺を中に挟んで、北は中物にランクされた能代から、上物に格付けされた越後まで日本海側一帯に産出され、敦賀への入津をみていたことを窺わせる。なお該報知によってみると、後引中油柏が箱館から送られているが、本表の干鰯が同地の産であったか否かは確証がない。(明和三年五月一三日付の報知に「小名木」の産地名が冠せられ、奥州北部産の印象が濃い)。

価格の単位となる桶の容量は明かでないが大坂相場において見られたと同じく、五盃入を一俵としていたことが知られる(前引加賀屋報知)。

柏類については一俵(二斗四ツ入り)を単位とすると思われる油柏(のち種柏)と、重量正味一〇貫目を単位とする荏柏の二種があり、後者は越後産の記載のあるものを見出せるが、前者には産地の記載がない。

その他断片的に採録した品目については説明を省略するが、小麦・小豆等の雑穀類の産地は、何れも他の主要穀類産地と同地方と推量して大過なからうと思われる。金相場については、前引の加賀屋の報知にも見られる通り、毎年の初相場の記載には「金六十二匁立」と固定しており、現実の金相場とは拘わりなく六十二匁立てで仕切られたものらしい。

なお、敦賀相場における各品目の価格の単位は、大坂相場と同様、殆んど記載がない。米については大坂相場その他から推算して、銀一〇匁当りの価格と判断した。魚肥については断片的な記事から鱈類・メ柏類は重量一

○貫目、千鰯類は一桶を単位と類推した。

最後に参考として、享保以降文化一〇年までの敦賀俵物（米・大豆）入津量の推移を第一図に示し、敦賀・大坂両地の米相場について、敦賀においては初相場（上米）、大坂においては前年暮の納相場⁽⁵⁾（筑前米）の数字を対置させて比較し、併わせて敦賀魚肥相場のうち「走り鯿」の相場の推移をグラフに図示しておいた（第二図）。

米価の変動は、天明の飢饉時の報知を欠くため断定的な判断は下せないが、概して中央市場大坂に比べ、敦賀においては作柄の豊凶その他の影響が鋭敏に作用していることが窺えるが、記載時期に関する限り両地間の相場の開きは存外に狭少であったことが認められる。西廻り海運の開通によって下関を迂回して大坂へ登す貨物の運賃が、輸送能力の貧弱な陸上輸送を伴う敦賀・大津經由の上方輸送費よりも著しく低廉であったことは、敦賀港湾都市の死命を制する重要な条件であったが、如上の両地間の価格差の狭少さは、米の仲介都市としての敦賀の有利性を一層否定するものであったと見られよう。

注

(1) 『福井県史』（第二冊第二編五四五頁）によれば、この化政期は北海に外国船出沒の報あって、西廻航路が忌避される風潮で、敦賀入津俵物の一時的増加をみた時期とされている。

(2) 本文二三八頁第九表参照。

(3) 大坂相場書、享和二年正月廿七日付の報知参照。

(4) 「指掌録」、『敦賀郡誌』四九五頁）による。享保以前については前掲小野氏論文に図示されている。

(5) 「自享保九年
至明治元年百四拾五年間大坂越年米高納相場表」（三井文庫写本）による。

(6) 前掲小野氏論文。

自 宝暦 5 年
至 文政 6 年

油物干鰯	干 鰯 秋引× 冬引□ 後引△	粕 重量	油粕(ア) 荳粕(エ)	懸 り 物	報 知 人 名	備 考
1 桶=付	1 桶=付	10貫目=付				
上 2.10 上 2.70 上 2.80 2.00 ~1.80	× 1.70 1.90		ア 3.56 エ 9.30 エ 9.00	8.40~8.50 10.70~10.80 10.00 位 11.00 位 9.50 10.70~10.80		※ 油粕2斗入 4ッ入 (以下同) ※ 荳粕正10貫目 =付(以下同)
2.40 ~2.50 2.00 ~2.20 中 1.70 2.10 2.40 3.00 ~3.10 中 2.70 ~2.80			エ 9.00 エ 11.00	近 甚 清水 近江屋清三郎 清水 近江屋甚三郎 清水 近江屋甚三郎 " " 10.00 清水		

敦賀相場表

近世近江地方の魚肥流入事情(鶴岡)

年 月 日	上 米 銀 10 匁=付	越 後 大 豆 銀 10 匁=付	走 り 鯉 重量 10 貫目=付	白 子 重量 10 貫目=付	数 子 重量 10 貫目=付	笹 目 重量 10 貫目=付
宝曆 5. 1. 初	石 0.225	石 0.245 秋馬 0.255	固 14.30	上 16.30	16.50	
5.11			新 12.70 ~12.80	16.50		9.30
6.-			13.50 ~13.70	18.00位	15.00	
8.16	0.140 ~0.145	0.230	15.70 ~15.80	上 20.20	19.50	12.00
10.24			17.50	21.50	21.00	
宝曆 6. 1. 初	古新 0.115 0.130	馬 0.210	束 17.30 固 17.50	上 21.50	21.50	
2. 2	0.110	上 0.200 秋 0.215	束 17.30 固 17.50	上 22.00	21.80	
4.23	0.120	秋馬 0.200	14.50 ~14.30	上 22.00	19.00	
6.10			新 13.80 ~13.90	新 19.00	16.00	9.30 ~9.50
6.18			新 15.00	20.00	17.50	10.00
7.19	0.130	0.210 ~0.220	14.50 ~14.70	20.70 ~20.80	17.70 ~17.80	
11.15	0.155	新 0.305 ~0.307	束 14.50 ~14.70	上 20.50	19.00	11.00
宝曆 7. 3. 8	0.180	秋 0.175 馬 0.195	固 14.00 束 13.80	中 18.00	17.30	
5.24		馬 0.180	新 14.00	21.00	17.00	10.00
6 8	0.190	0.150	14.50	22.00	17.00	10.70 ~10.80
11.20	新 0.195 ~0.207 古 0.180	0.160	固 14.50 ~14.70	上 20.20 ~20.30	次 18.50	11.00
宝曆 8. 2.17	0.170	0.148 ~0.149	固 17.80	中 21.00		
2.20	0.170	0.140 ~0.147	17.60 ~17.80	上 23.00	21.00	
6. 3	古 0.170 ~0.173	0.155 ~0.160	新正 16.70 ~16.80	上 22.70 ~22.80	18.30 ~18.50	11.50
7. 2	0.170	最上 0.165 0.200 ~0.210	16.70 ~16.80	23.50	20.00	12.30 ~12.50
8.14	0.175 ~0.180		正 17.00	23.30 ~23.50	不子 21.00	12.30 ~12.50
12. 7	0.180	秋 0.235 馬 0.240	固 17.00 束 16.80	23.00	21.00	13.30

油物干鰯	干鰯 秋引× 冬引□ 後引△	粕 重量 10貫目=付	油粕(ア) 荏粕(エ)	懸り物	報知人名	備考
1桶=付	1桶=付		ア 3.60		近江屋 安田 安田五郎左エ門	鯆・教子高直にて 買人無之 売かいなし
2.20 ~2.30	△ 1.40 ~1.50			9.50 位		
2.20 ~2.30	× 1.45 ~1.50					
中 1.70 ~1.90	× 1.35 ~1.40					
2.10 ~2.20				8.40 ~8.50		
上 2.10 ~2.20	△ 1.30 ~1.40			8.20 ~8.30	安田五郎右エ門	金 62 匁立
上 1.80 中 1.60	△ 1.20			7.20 ~7.30		
上 2.00 中 1.50~1.60	□ 1.20		越後粕 9.00	7.50	清水	
2.10 ~2.20	(先頃か上方辺高直=成候故此方鯆過分高直=致候)					
上 2.00 ~2.20	□ 1.20 ~1.40		越後粕 9.00	7.20 ~7.30	清水 仁兵衛 依兵衛 安田五郎左エ門 安田	金 62 匁立
2.10 ~2.20	△ 1.40					
前と同じ						
上 1.90 中 1.50					清水	
同 事					近江屋	
新 1.80 ~1.90						
上 2.00 中 1.70	△ 1.30 ~1.40			8.00 位		
上 2.00 中 1.65					安田五郎左エ門	
上 2.00	△ 1.30 ~1.40		エ 7.20 ~7.30	7.40 ~7.50	安田	
上 2.00	上 1.60 ~1.70			7.40 ~7.50	安田五郎左エ門	
上 1.80 ~1.90	□ 1.10 ~1.20		エ 7.50	7.50 ~8.00	清水	小麦 石 0.400 小豆 0.400
1.80 ~1.90					近江屋甚三郎	
上 1.70 ~1.80	□ 1.10 ~1.20			7.00		

年 月 日	上 米	越後大豆	走 り 鯉	白 子	数 子	笹 目
	銀 10 匁=付	銀 10 匁=付	重量 10貫目=付	重量 10貫目=付	重量 10貫目=付	重量 10貫目=付
宝曆 9. 2. 20	古 0.173~5 新 0.183~5	上 0.210	19.50	上 24.30 ~24.50	22.00	15.80
3. 16	0.180	0.230	19.50		22.00	
6. 18	0.200	上 0.270	13.00	上 19.00	15.50	8.30 ~8.50
7. 3	0.225 ~0.227	0.290 ~0.295	正味 13.00 位	20.00 位	不 _カ 子 16.50 位	8.50 ~8.70
10.15	古 0.220 ~0.225	上 0.290 ~0.295	13.00	上 19.50 位	17.50	9.00
11.18			固 12.90 かやへ13.20	上 18.50	17.50	8.90
宝曆 10. 1. 11	0.230	新 0.320 秋 0.345	13.30	上 18.80	17.80	9.30
6. 4	0.300	上 0.380~90 秋 0.400	13.00	上 18.50	17.50	8.20 ~8.30
6. 11	0.280	最上 0.400	新 12.70			
8. 4	0.220	上 0.310 秋 0.335	16.50	21.00	20.00 位	12.70 ~12.80
宝曆 11. 1. 初	古 0.270 新 0.276	古秋 0.365 新 0.265	15.00	19.00	19.50	
2. 8	0.270	0.340 古 ~0.350	15.00	18.70	19.00	
3. 18	0.290	0.270 新 ~0.280	14.00	17.00	18.00	
3. 20			東 13.80 固 14.00	15.50		
4. 21	新 0.330 ~0.350	0.320~5 古 0.385	14.00	上 16.70 ~16.80	16.00	
5. 10		最上 0.320 0.360	古 13.50	上 17.00	16.30 ~16.50	
7. 4	0.275	0.330	12.60 ~12.70	上 18.00	16.00	8.50
9. 1	0.285	0.320 ~0.330	13.20 ~13.30	18.00	17.00	9.20 ~9.30
9.19	0.300	0.340 ~0.350	13.50 ~13.60	18.00	18.50	9.60
11.18	0.310	新上 0.300 秋 0.340	13.00 位	17.00	17.50	9.00
宝曆 12. 1. 16	新 0.300 古 0.325	秋 0.300	固 13.50 東 13.50	17.70	17.00	10.00
2. 3	0.270 地新 0.270	上 0.270~5 秋 0.290~300	15.30 ~15.50	19.00	17.50	11.70 ~11.80
5. 8	0.275	最上 0.347 津輕 0.365	新 11.00 ~12.00	16.00	不 _カ 子 15.00	6.50

油物干 歸	干 歸 秋引× 冬引□ 後引△ 1 桶=付	粕 重量 10貫目=付	油粕(ア) 荏粕(エ)	懸 り 物	報 知 人 名	備 考
上 1.70 ~1.80	□ 1.00 ~1.80		エ 6.50	7.50 ~7.70	清水	
1.50 ~1.60	□ 1.00 ~1.80			8.00 位		少々暑気強ク相成申候
酒田 1.50 ~1.60	□ 1.20 ~1.30			8.40 ~8.50		金 62 匁立
1.60 ~1.70				9.00		
上 1.60 ~1.70	□ 1.20 ~1.30			9.00 位		不景気=御座候
上 2.20 ~2.30	□ 1.20 ~1.30			8.50~8.60	清水	
上 2.20 ~2.30				8.50~8.70	清水	
同 事					近江屋	
上 2.20 ~2.30	△ 1.50 ~1.60			8.70~8.80	安田	
上 2.20 ~2.30	□ 1.20 ~1.30			9.50~9.60		金 62 匁立
上 2.10 ~2.30						
上 2.20 ~2.30	△ 1.60 ~1.70		ア 3.60 ~3.70		近江屋	
上 2.20 ~2.30	△ 1.50 ~1.60			8.70~8.80	安田	
上 2.10 ~2.20	□ 1.50 ~1.60		エ 9.50			金 62 匁立
上 2.30 ~2.20			ア 3.50 ~3.60		近江屋	
上 2.30 ~2.20	× 1.60 ~1.70		エ 9.30*		近江屋	*越後粕
中 1.70 ~1.80	□ 1.30 ~1.40			8.20~8.30	清水	
新引干か類一切無之。秋引冬引。 入舟無御座候。古上油物 2 匁3分桶			荏粕。種 粕入舟なし		近江屋	
上 2.20 ~2.30	△ 1.80 ~1.90			8.40~8.50	安田	
上 2.20 ~2.30	△ 1.70 ~1.80			8.40~8.50	安田	
	□ 1.60 ~1.70			8.10	清水	
上 2.40 ~2.50	△ 1.80 ~1.90			8.50~8.60	安田	

年 月 日	上 米 銀 10匁=付	越後大豆 銀 10 匁=付	走 り 鯉 重量 10貫目=付	白 子 重量 10貫目=付	数 子 重量 10貫目=付	笹 目 重量 10貫目=付
宝曆 12. 5.28	0.255	最上 0.335 津輕 0.356	10.00	16.50		7.00
7. 2			正味 11.00	17.00	次 15.20 ~15.30	
7.23	0.230	秋 0.330	12.00 ~12.20	16.70 ~16.80		7.20
宝曆 13. 1. 初	0.210~5 地新 0.210	上 0.210 秋 0.230	12.80	17.30	16.30	9.00
3. 9	0.210	古 0.230 馬 0.240	13.00	17.30	不 _レ 子 17.00	9.50
3.27	同	事	かや~11.60	17.00	15.80	
宝曆 13. 6.19	0.215	上 0.245 津輕 0.265	江差 18.00 かや~13.30	19.20 ~19.50		9.00
7. 4	0.205	津輕 0.275	江差 13.50 かや~14.00	20.00		10.00
7.21			14.50 ~14.70	20.00		10.30 ~10.50
8. 7		0.290	15.00 かや~15.30	20.00	18.30 ~18.50	10.00
宝曆 14. 1. 初	0.203	0.245~250 秋 0.225	固 16.30	21.70	19.80	12.70
6. 3			新 15.30 身欠付 15.90	新 22.00	上 19.00	
10.25			18.00		不 _レ 子 23.00位	
12.28	0.190	最上 0.230 秋 0.255	17.90	22.50	22.00	13.70
明和 2. 1. 初	古 0.198~205 新 0.220~3	上 0.230 秋 0.260	17.00	上 21.80	不 _レ 子 21.20	12.80
3.14	古 0.213~5 新 0.230	上 0.260 秋 0.285	固 17.50~70 かや~18.00	上 22.30 ~22.50		
4.10	古 0.215~20 新 0.230~5	上 0.280 秋 0.295	江差 17.80 かや~22.50	上 22.80	次 20.00	
4.24	0.220 位	最上 0.300 津輕 0.310	新 14.50 位	20.00 位		8.50 ~8.70
5.18	0.223 ~0.235	0.284 秋 0.324	新鯉類此間段々入船仕候得共鯉・白子、笹目共直段出来不仕候			
7. 5	0.220 ~0.230	上 0.310	16.50	22.00	20.00	
7.23				22.30 ~22.40	20.00	11.50
7.20	0.225	最上 0.280	16.70	22.40		11.50
8.12	0.215	0.220 ~0.235	17.50	22.40	21.00	12.00

油物干鰯	干鰯 秋引× 冬引口 後引△ 1桶=付	粕 重量 10貫目=付	油粕(7) 荏粕(8)	懸り物	報知人名	備考
1桶=付	1桶=付	10貫目=付				
	× 1.70		ア 3.50 ア 3.60		近江屋	石 小豆 0.180 ～ .190 小麦 0.270 ～ .280
	× 1.70			9.70～9.80	安田利左エ門	
	× 1.70				近江屋	
2.50 ～2.60	△ 1.60 △ 1.70			9.70～9.80	安田、近江屋	
	1.55 ～ 1.60※		ア 3.30		近江屋	※あじ干鰯
酒田上 2.80～2.90				9.30～9.40	近江屋、安田	
" 3.30					近江屋	
中 1.90					近江屋	
	× 1.70			10.40 ～ 10.50	安田	
					近江屋	
	× 1.70			10.70 ～ 10.80	安田	
	× 1.70				近江屋	
	1.60			9.70 ～ 9.80	安田	
	1.60 ～ 1.70			10.20 ～ 10.30	安田	
	× 1.65 ～ 1.70				近江屋	
	× 1.70				近江屋	
	× 1.70				近江屋	
	× 1.70			9.00 位	近江屋	
	× 1.60 ～ 1.70				近江屋	
新 2.50 ～ 2.60				9.60 ～ 9.70	安田	
2.50 ～ 2.60					近江屋	石 小豆 0.210 ～ 0.230

年 月 日	上 米	越後大豆	走 り 鱈	白 子	数 子	笹 目
	銀	銀	重量	重量	重量	重量
	10 匁 = 付	10 匁 = 付	10 貫目 = 付	10 貫目 = 付	10 貫目 = 付	10 貫目 = 付
明和 2. 9. 16	0.180	0.130 ~ 0.135	皆掛ケ 17.80	上 22.50	不 _カ 子 22.50	12.70 ~ 12.80
10. 11	0.175 ~ 0.180	新 0.125	〃 18.30	上 22.50	〃 22.50	12.70 ~ 12.80
10. 29	0.180	新 0.130~40 古 0.160~70	17.90	22.50	同 事	12.80
11. .5	0.180 ~ 0.185	新 0.140~50 古 0.165~70	固 17.90	上 22.50	〃 22.20	12.70 ~ 12.80
明和 3. 1. 初	新 0.190~5 古 0.185	新 0.130	固 17.30	上 22.00	〃 21.50	12.80
3. 23	新 0.190	のへち 0.170	17.50	上 22.00	21.50	
5. 9	0.185 ~ 0.190	0.190	新東 14.00 16.00	上 21.00		10.50 ~ 10.60
5. 25	0.183 ~ 0.185	上 0.163~5 秋 0.190~5	新 14.30 ~ 14.50	上 21.80		10.70 ~ 10.80
7. 21	0.190	0.200 ~ 0.220	正ミ 15.00 位	21.00		11.00
8. 15	0.190	新青 0.195	15.70 ~ 15.80	21.00		11.30 ~ 11.50
9. 15	0.180	新 0.210 ~ 0.213	16.00	21.00	20.50	11.40 ~ 11.50
9. 19	古 0.183~5 新 0.193~200	新上 0.205 ~ 0.210	皆掛 15.80 位	21.00	不 _カ 子 20.70 ~ 20.80	11.50
10. .3	0.180 新 0.190~5	古 0.220 新上 0.215~20	15.90	21.00	20.50	11.50
10. 11	古 0.182~3 新 0.190~5	0.210	か _カ け 15.70 ~ 15.80	21.00	不 _カ 子 20.50	11.50
明和 4. 1. 17	0.185	上 0.225 秋 0.235	14.70	上 20.50	19.50	11.00
2. 23	新 0.195 0.180	新上 0.220 秋 0.230	15.30	な し	な し	な し
2. 20			15.30	えぞ 19.50 上 21.00 位	不 _カ 子 20.10	
3. .8	古 0.175 新 0.177~80	上 0.217 ~ 0.220	15.80	はね 20.00 えぞ 20.00	〃 20.50	
3. 24	古 0.180~5 新 0.180~90	上々 0.220 秋 0.225	15.80	中 20.00 えぞ 20.00	次 19.70	
4. 23	古 0.180~3 新 0.193~200	上々 0.217~8 秋 0.220~5	15.30	中 20.00		
5. 12	上 0.180 地 0.160	秋 0.210 位	15.50	な し	な し	な し
6. 16	0.182 ~ 0.183	上 0.210 秋 0.218	14.00 ~ 14.40	上 22.00 位	17.00 位	11.30
6. 20	0.180 ~ 0.185	0.213~5 秋 0.223~4	正味 15.50 ~ 15.70	22.50 ~ 22.70		11.70 ~ 11.80

油物干鰯 1桶=付	干 鰯 秋引× 冬引□ 後引△ 1桶=付	粕 重量 10貫目=付	油粕(ア) 荏粕(エ)	懸 り 物	報 知 人 名	備 考
上 2.60 ~ 2.70	△ 1.70 ~ 1.80			9.00 位	安田	
上 3.00 ~ 3.20※	△ 2.10 ~ 2.20			9.80 ~ 9.90	〃	※酒田
上 3.00 中 2.50					近江屋	
上 3.00 中 2.65	△ 2.10 ~ 2.20			9.50 ~ 9.60	安田	
上 3.00 ~ 3.20					近江屋	
3.00 ~ 3.20	× 1.60 ~ 1.70				近江屋	能登新米 0石195~7
上 3.10 ~ 3.20	× 1.60 ~ 1.70				近江屋	
上 3.00 ~ 3.20	× 1.60 ~ 1.70				近江屋	
上 3.00 ~ 3.20	× 1.70 ~ 1.80		ア 4.00 位	9.20 ~ 9.30	敦賀問屋中	
3.20 ~ 3.30					近江屋	
新 2.70	小なき 1.50		エ 10.50		近江屋	
2.50 ~ 2.60	小なき 1.50		エ 10.50		近江屋	
上 2.60 ~ 2.70	□ なし				安田	
上 2.40 ~ 2.50					近江屋	
上 2.30 ~ 2.50	△ 1.70 ~ 1.80		ア 3.50		敦賀浜	
干か類少々入舟仕候得 共未直段相立不申候			エ 8.50		近江屋	※身欠付 ※※身欠取
上 1.80 ~ 1.90	× 1.20				角野市兵衛	小豆 0.石165
上 1.80 ~ 1.90					木綿屋六右エ門	
上 2.00 位	△ 1.20 ~ 1.30			9.50 ~ 9.70	〃	
2.00					近江屋	

年 月 日	上 米	越後大豆	走 り 鯉	白 子	数 子	笹 目
	銀 10 匁=付	銀 10 匁=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付
明和 4 7. 22	古 0.170 ~0.165	上 0.190 秋 0.200	16.50	23.00	19.50 ~19.70	12.00
8. 12	0.165	0.180	18.80	25.00	22.00	13.50
8. 10	0.165 ~0.170	0.183~5 秋 0.190	18.50	24.50		13.50 ~13.70
9. 15	新 0.185 0.175	新 0.190 秋 0.200	19.00	25.00	22.80	14.80
9. 21	古 0.185~7 新 0.200	新 0.203~5 秋 0.210	18.70 ~18.80	25.00	不 _レ 子22.80	14.50
閏 9. 20	0.180 古~0.187	新 0.225~30 秋 0.230~7	皆掛 18.00	25.00	" 22.50	14.50
10. 13	古 0.170~80 新 0.180~5	0.225 秋 0.235	17.50	25.30	" 22.20	14.30
12. 13	0.178 新~0.180		18.00	26.00	" 23.00	14.80
明和 5. 1. 初カ	古 0.160 地新 0.172	0.210	18.80	27.00	" 23.70	15.60
2. 2. 2	古 0.152~3 新 0.157~60	0.200	19.80	かやへ20.00	" 24.20 ~24.30	16.30
2. 19	古 0.157~60 新 0.160~5	0.203	20.00	" 20.20	" 25.00	
5. 13	0.160 新~0.165	秋 0.220 ~0.225	新正 16.20 ~16.30	24.00 位		10.50
5. 28	0.155 ~0.157	0.210 ~0.215	正 新15.50~ 15.70	24.00		10.70 ~10.80
6. 16	0.155	0.195	新 16.00	上 24.70	18.60	11.20
10. 7	古 0.147~8 新 0.160	上 0.210 秋 0.220	17.50	26.00 位	不 _レ 子23.00	12.70 ~12.80
明和 6. 1. 初	0.153~5	上 0.202 秋 0.207	17.30	25.50	" 23.00	13.30 ~13.50
5. 10	0.165 ~0.170	0.227 秋 0.232	11.70~ 11.20~ 正 新10.30	20.30 ~20.50		7.30 ~7.50
5. 20			10.50 新~11.00	20.00		7.00
6. 2				19.30 ~19.50	16.50	7.30 ~7.50
6. 15	0.170	上 0.230 秋 0.240	11.50	19.20 ~19.30	不 _レ 子17.50	7.50
6. 17	0.170	上 0.215 秋 0.230	11.50 ~11.60	19.20 上~19.30	" 17.50	7.50
7. 23	0.167	上 0.240 秋 0.260	12.50 ~12.60	上 19.00	" 18.00	8.50
8. 12	0.165 ~0.167	上 0.255~7 秋 0.270	13.20 ~13.30	19.00	" 18.20 ~18.30	9.00

油物干鰯	干 秋引× 冬引□ 後引△	粕 重量 10貫目=付	油粕(7) 在粕(8)	懸り物	報知人名	備考
1 桶=付	1 桶=付					
な	し			9.50 ～ 9.60	安田	
上 1.90	× 1.10 ～ 1.20			9.20 ～ 9.30	角市	
上 2.10 ～ 2.30	× 1.20 ～ 1.30		エ 9.00	9.70 ～ 9.80	敦賀問屋中	
2.60	× 1.20				角野	
前=同じ						
上 2.10 ～ 2.20	× 1.10 ～ 1.20				角野	※は越後米
上 1.60 ～ 1.70	△ 1.00		エ 8.00		近江屋	
1.50 ～ 1.60	× 1.10				角市	小豆 0.260～0.270
上 1.60 ～ 1.70	△ 1.10				角野	小豆 0.220
1.70 ～ 1.80	× 0.80 ～ 0.90				近江屋	
前=同じ					安田	
1.60 ～ 1.70	△ 1.00 ～ 1.10				近江屋	
上 1.60 ～ 1.70	△ 1.00			9.50		小麦 0.190 小豆 0.170
上 1.60 ～ 1.70	△ 1.00				角市	
1.60 ～ 1.70	△ 1.00					
1.70					近江屋	
1.60 ～ 1.70	△ 1.00		エ 7.50		"	
上 1.60	× 1.00 位				角市	小豆 0.200 ～ 0.210
1.70	△ 1.00			9.50	近江屋	
1.70	△ 1.00				"	小豆 0.230
1.70	△ 1.00				近甚	
1.50	△ 0.90		エ 7.00	0.240 小豆 ～ 0.250	角野	※ 敦賀上米
1.60 ～ 1.70	△ 0.80 ～ 0.90				近江屋	

年 月 日	上 米		越後大豆	走 り 鱈	白 子	数 子	笹 目
	銀	銀					
	10匁ニ付	10匁ニ付		10貫目ニ付	10貫目ニ付	10貫目ニ付	10貫目ニ付
明和 6. 9. 5	0.160	0.270~80 新 0.255		13.50	19.00	18.50	10.00
12. 2	新 0.177~8 0.172~3	上 0.270 秋 0.283~5		13.70	18.70	不 _レ 子 18.30	10.50
明和 7. 1. 初	古 0.170~5 地新 0.185	0.250		13.50	18.70	" 18.30	10.50
2..6	古 0.170 地新 0.175	新 0.215		12.70	17.80	" 17.50	10.50
3.11	新 0.170 ~0.173	0.220		12.70	19.00	" 17.50	
3.27	*古 0.173~5 新 0.177~8	0.270 秋 0.280~90		12.70	19.20	" 17.50	
6.21	0.185 ~0.187	0.290	正ミ 新 10.50		18.00		7.00
閏 6.20	0.205	秋 0.300	11.70 ~11.80		17.80		7.50 ~7.60
8.18	0.190 ~0.195	上 0.245	14.00	20.00	不 _レ 子 18.30		9.50
10.12	古 0.190~5 新 0.213~5	0.215	13.50 位	19.70 ~19.80	" 18.00		9.00
11.18			12.00	19.50	16.80		
11.24	古 0.190 新 0.220~3	古 0.245	12.00	19.50	不 _レ 子 17.20 ~17.30		9.00
明和 8. 1. 初	古 0.190 新 0.210~5	0.213~5 秋 0.225	12.30	19.50	" 16.50		9.00
2..3	古 0.190 新 0.213~5	新 0.215	12.30 ~12.50	20.00	" 16.50		9.20
2.21	古 0.192~5 新 0.203~15	上 0.210 位	固 12.30 ~12.50	上 20.00 ~20.50	" 16.50 ~16.70		9.00
4. 6	新 0.213 ~0.215	0.230 上 0.220 位	固 13.50	上 20.00	不 _レ 子 17.00		
8.28	古 0.215~7 新 0.225	新 0.195 古 0.205~10	正ミ 14.00	20.00			8.50
9.16	0.220	新上 0.182 古 0.200 位	14.20 ~14.30	20.00	不 _レ 子 17.20		8.50
明和 9. 1..8	古 0.203~10 地新 0.213~5	上 0.173 秋 0.180	固 13.50 束 13.70	19.80	" 17.00		8.50
2.22	新 0.225 ~0.230	上 0.190 秋 0.195~7	固 14.00 位	20.00	" 17.30		8.50
3.16	新 0.240 ~0.250	0.200	固 14.00 束 14.20	20.00	" 17.30		
6.16	* 0.250	上 0.200 秋 0.213	新 12.00 位	18.70 ~18.80	" 15.00		7.00
11.23	古 0.200~7 新 0.210	上 0.210 秋 0.220	上かけ 束 13.50	上 19.00	" 16.80		8.20 ~8.30

油物干鰯	干 鰯 秋引× 冬引□ 後引△	籾 重量 10貫目=付	荏 粕 正 10 貫 目=付	小 豆 銀 10 匁=付	報 知 人 名	備 考
1 桶=付	1 桶=付	10 貫目=付				
上 1.40 ~ 1.50	△ 0.80		6.70	石 0.290	角市	
上 1.50 ~ 1.60	△ 1.00				角市	
上 1.50 ~ 1.60	△ 1.00				角野	
1.60	△ 1.00				近江屋	
1.60	△ 1.00				近江屋	
上 1.50 ~ 1.60	△ 1.00			0.260 ~ 0.270	角市	
1.90 ~ 2.00	△ 1.20 ~ 1.30				近江屋	
上 2.00	△ 1.20 ~ 1.30				角野	
上 2.00 ~ 2.10	△ 1.20 ~ 1.30				近江屋、角野	
2.20	△ 1.20 ~ 1.30				近江屋	
上 2.10 ~ 2.20	△ 1.30 ~ 1.40		10.00		角野	
上 2.20 ~ 2.30	△ 1.20 ~ 1.30				近江屋	
	△ 1.20 ~ 1.30	白子、粉子無数一向売切申候。さゝ め無数、買人多し。干鰯るいなし			近江屋	
上 2.20 ~ 2.30	△ 1.20 ~ 1.30			0.260	角野	
上 2.30	△ 1.20		9.50		近甚	
上 2.20 ~ 2.30	△ 1.20 ~ 1.30		9.50 位		安田	※は新川米 懸り 9.20~9.30
上 2.30	△ 1.30				角野	
上 2.50 ~ 2.60	△ 1.50				安田	懸り物 9.50 ※は新川米
上 2.30 ~ 2.40	1.30 x ~ 1.40				角野	
上 2.30 ~ 2.40					角野	
				0.200 位	角野	
				0.220	角野	

年 月 日	上 米 銀 10 匁=付	越後大豆 銀 10 匁=付	走 り 鯉 重量 10 貫目=付	白 子 重量 10 貫目=付	数 子 重量 10 貫目=付	笹 目 重量 10 貫目=付
安永 2. 5. 14	0.200	0.210 秋 0.220	9.00	16.50 ~16.80	不 _レ 子 13.00	5.70
7. 20	0.207	0.220 秋 0.230	10.00	16.30 ~16.50	" 14.00	6.50
9. 23	新 0.220 0.205	新上 0.210 秋 0.220	10.00	16.30 ~16.50	" 14.50	8.30 ~8.50
12. 15	古 0.205~10 新 0.230~5	上 0.240 秋 0.250	束 10.00	16.00	" 14.50	7.50
安永 3. 1. 11	古 0.203~7 地新 0.230	0.243 秋 0.255	固 10.00 束 10.10	16.00	" 14.70	7.20
2. 23	古 0.205~7 新 0.230	新上 0.247 秋 0.255	10.00	16.00	" 14.70	7.20
6. 4	0.210	上 0.245 秋 0.260~5	正ミ 新 11.00	17.00		7.00
7. 2	0.212 ~0.213	0.245 秋 0.265	11.50	17.00	" 14.20 ~14.30	8.00
7. 23	0.185 ~0.190	上 0.210 秋 0.240	束 14.00	17.30 ~17.50	" 15.50	10.00
8. 13	0.190 ~0.195	上 0.210 秋 0.240	上かけ 束 14.70	18.00	" 17.00	10.50
8. 12	0.187 ~0.188	上 0.215 秋 0.230~40	新 14.70 古 14.00	18.00	" 16.50	10.00
9. 一	0.203 ~0.205	古上 0.250 秋 0.260	13.90	18.00	数子 16.80	10.50
安永 4. 1. 11	古 0.212~3 新 0.215	上々 0.230 古 0.255~60	固 14.70 束 14.90	上 18.30	不 _レ 子 17.30	11.20
2. 7	古 0.213~5 地新 0.215	上 0.225 秋 0.245~7	固 15.00 束 15.20	18.80		11.60
2. 23	古 0.212~3 新 0.215	0.230 新秋 0.245	固 15.20	19.00	" 18.00	11.80
6. 3	0.205 ~0.210	上 0.240 秋 0.260~70	正ミ 新 13.50	上 18.00		8.50
6. 18	※ 0.185 ~0.197	上 0.230 秋 0.250~60	15.00 位	19.50	数子 不 _レ 子 16.00	10.00 位
8. 12	0.195 ~0.197	0.230~40 秋 0.265	16.00	21.50	不 _レ 子 19.00	11.00
9. 19	※ 0.210	0.265 古 0.290~300	16.00 位	21.80	19.50	11.00
10. 13	0.215	新 0.255~60 古 0.270~80	16.00	21.80	不 _レ 子 19.50	11.00
11. 5	0.205 ~0.207	新 0.255 古 0.263	16.00	21.80	" 19.50	11.00
安永 5. 8. 29	0.205	新 0.230 古 0.250~80	17.00	23.50	" 20.50	12.50
9. 24	0.203 ~0.205	0.210	17.00	23.00	" 20.50	12.50

油物干鰯 1 桶ニ付	干 鰯 秋引× 冬引□ 後引△ 1 桶ニ付	粕 重量 10貫目ニ付	荏 粕 正 10 貫 目ニ付	小 豆 銀 10 匁ニ付	報 知 人 名	備 考
中 2.50 上なし	△ なし		11.50	0.200 0.200 0.250 ～0.260	角野 近江屋	
上 2.30 ～2.40	△ 1.30 △～1.40 △ 1.30 △～1.40		11.00			石懸り 9.40～9.50
上 2.60				最上 0.260	角野 近江屋 近江屋	
	地引 1.20			0.260	角野 近江屋 近江屋	
				0.260 最上 0.290 ～0.295	近江屋、角野 近甚	※上大豆 当分入舟なし
上 2.20 ～2.30	中 1.80～1.90 下 1.10～1.20				近江屋	懸り物 9.00
上 2.00	□ 1.50		8.50	0.210	角野	
2.00	△ 1.30 △～1.40			0.220 ～0.230	角野	
上 1.90	△ 1.20 △～1.30				近江屋	
上 2.00	から 1.20 ～1.30			0.240 ～0.280	近江屋	
上 2.00	△ 1.20 △～1.30					金 62 匁立
上 1.80 ～1.90	△ 1.10 △～1.20					

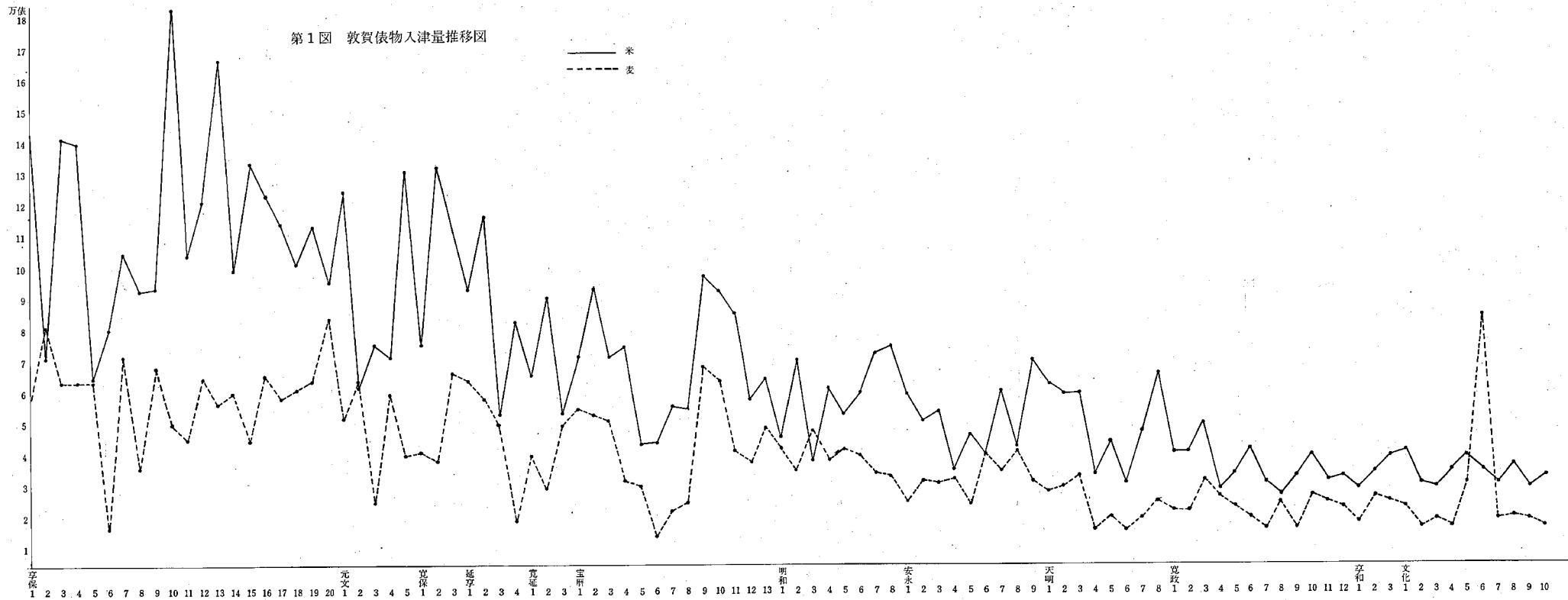
年 月 日	上 米 銀 10 匁=付	越後大豆 銀 10 匁=付	走 り 餅 重量 10 貫目=付	白 子 重量 10 貫目=付	数 子 重量 10 貫目=付	笹 目 重量 10 貫目=付
安永 5. 11.10	0.180	0.190 秋 0.195	16.00	22.50	不 _ナ 子 20.00	12.50
12. 5	地新 0.182 古 0.180	上新 0.190 古 0.210	15.80	21.00	" 19.50	12.50
安永 6. 6.14	0.160	0.230	新 14.50	19.80	" 15.80	9.80
10. 一			皆 14.00 正 14.60		" 17.70 ~17.80	
安永 7. 1. 初	0.185~7 地新 0.210	上 0.250~60 秋 0.270~80	14.70	19.00	18.50	10.80
4. -6			16.20	20.50	不 _ナ 子 18.50	12.00
7. 27	0.225	上 0.250 秋 0.270	正ミ 11.50 束 ~11.60	上 17.50 ~17.70		8.00
8. 13	0.230 ~0.235	最上 0.260	正ミ 束 11.50	上 17.00	不 _ナ 子 16.00	8.50
9. 5	0.230	0.250	11.70 ~11.80	17.00	" 16.70	8.50
9. 21	0.233 ~0.235	上 0.190	束 12.50	上 17.00	" 16.50	8.50 ~8.70
11. 28	0.213 ~0.215	のへち 0.240	固 12.60 ~12.70	上 18.00	" 17.00	9.50
安永 8. 5. 14	0.213 ~0.215	0.250 ~0.260	束 12.70 ~12.80 新 11.00位	17.50	" 14.50	7.50
8. 16	0.245	最上 0.290 ~0.295*	束 12.50 ~12.70	18.80	" 17.00	8.30 ~8.50
10. 28	古 0.220~30 新 0.220~8	新 0.275~7	皆かけ 13.00		" 17.50	8.70
11. 27	0.225	上 0.275 秋 0.290	束上かけ13.10 固 13.00	上 18.80	" 17.50	9.00
安永 9. 1. 16	古 0.223~5 地新 0.250	上 0.285 秋 0.290	固 13.00 束 13.10	上 18.80	" 17.50	8.70
天明 1. 1. 6	古 0.240 地新 0.235	上 0.230 秋 0.240	固 13.30 束 13.50	上 17.00	" 16.80	9.30
閏 5. 4	0.220	0.235 秋 0.255	新 11.00位	新 17.00位	新" 14.70	7.00
6. 12	上々 0.190	0.205 秋 0.215	12.00	17.00		7.50 ~8.00
7. -2	0.200 ~0.207	上 0.210 秋 0.230	束 12.50	17.00	" 16.50	8.00
10. 21	0.190 ~0.193	0.190	上かけ 束 13.00	上 16.50	" 16.50	9.00
天明 2. 1. 初	0.187	新 0.202	固 12.90 束 13.00	上 16.30	" 16.50	9.00
天明 3. 1. 11	古 0.145 新 0.155~60	上 0.210 秋 0.220	固 14.50 束 14.60	上 19.30	な し	10.00位

油物干鰯	干 鰯 秋引× 冬引口 後引△	籾 重量 10貫目=付	荏 粕 正 10 貫 目=付	小 豆 銀 10 匁=付	報 知 人 名	備 考
1 桶=付	1 桶=付	10貫目=付	正 10 貫 目=付	10 匁=付		
上 2.50 上 2.60	△ 1.60 △ 1.70				角野	
上 2.50 上 2.60	△ 1.50 △ 1.60	21.20 21.30	12.50			
上 2.40 上 2.50	から 1.40 △ 1.50		12.50		近江屋	
上 2.70 上 3.00	△ 1.50 △ 1.60	22.00	12.00		近江屋	
上 3.00		22.00	12.00			石懸り 10.50 位
上 3.40 上 3.50	△ 2.30 △ 2.50		15.00	小麦 0.135		たね 0.035 ~ 0.050
上 3.50	△ 2.60 △ 2.70			小豆 0.100	角野	小麦 0.125
上 3.70	△ 2.50 △ 2.60	31.00 32.00	16.50			正 10 貫目=付 種粕 13.50
上 3.20 上 3.30					角野	
上 2.70 上 2.80	△ 1.60 △ 1.70	はん上 22.00	12.00 13.00			
上 3.00			14.50	0.175~7		たね 0.120
上 3.40 上 3.50	△ 1.80 △ 1.90		14.50			
上 3.40 上 3.50	△ 2.00		15.00	最上 0.200 越後 0.210	加賀屋宗助	小麦 0.175 大麦 0.320~30
上 2.40 上 2.50	△ 1.40 △ 1.50		12.00	上 0.200 位	近江屋甚三郎	たね粕 9.00 位 " 9.50
上 3.10 上 3.20	△ 1.80 △ 1.90		12.50		近江屋甚三郎	小麦 0.180 ~ 0.190
上 12.50 中 8.00		上 19.50			加賀屋	※ 越後 5 孟入 ※ 能代 "
上 2.70 上 3.00	1.60 ~ 1.70		12.50	小豆 0.185	近江屋甚三郎	種粕 9.50
	× 1.70 × 1.80	鰯 23.50	13.00		近江屋甚三郎	" 10.00
	× 1.70 × 1.80	" 23.50	13.00			" 10.00
上 3.00	△ 1.70 △ 1.80		13.00	0.130 ~ 0.140		" 10.00 金 62 匁立
		鰯 21.50				
上 3.20 上 3.30	△ 1.70 △ 1.80		13.00	0.170 ~ 0.180		種粕 11.00
上 2.50 上 2.60	△ 1.30 △ 1.50		12.00	0.170 ~ 0.180		" 9.00

年 月 日	上 米	越 後 大 豆	走 り 鯖	白 子	数 子	筈 目
	銀 10 匁=付	銀 10 匁=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付	重量 10 貫目=付
天明 3. 6. 17	0.135 ~0.137	0.225 秋 0.233	18.00	24.50 ~24.80	なし	12.50
7. 23	0.133 ~0.135	上 0.210 秋 0.220	東 19.50	上 26.50	不 _子 23.50 ~24.50	13.30 ~13.50
9. 20	古 0.132 新~0.133	0.183 新~0.185	東 23.50	上 28.00	" 26.00	14.00
12. 5	0.115	上 0.165 秋 0.170	21.00	30.00	" 27.00	14.00
天明 4. 1. 初	古 0.110 地新 0.120	上 0.160	固 22.00 東 22.20		" 27.00	15.50
5. 15	0.100 新~0.103	0.140 ~0.145	東 23.00	30.00 位	" 25.50 ~26.00	16.00
7. 2	越後 0.100	三田 0.140	27.50	36.50 ~37.00	31.00	18.50
7. 22	0.137 ~0.138	0.200 ~0.204	東 28.00 ~30.00	39.00	" 34.00 ~35.00	20.00
11. 23	上々 0.145	新 0.145 秋 0.155	28.00	38.00	" 33.00	19.00
天明 6. 6. 13	0.177 ~0.178	上 0.130 秋 0.140 位	東 19.00	上 28.00 ~29.00	" 24.00 位	13.00
8. 15	0.125 ~0.127	上 0.135 秋 0.140	東 25.00	32.00	" 31.00	
天明 8. 1. 初	古 0.135 ~0.137	新上 0.135 秋 0.137~8	固 22.80	37.50	" 28.50	17.00
寛政 2. 1. 5	0.170~3 地新 0.170	新上 0.150 秋 0.160	固 26.00	38.00	" 35.00	19.30 ~19.40
寛政 3. 7. 21	古 0.234 ~0.245	上 0.235 秋 0.265	19.00	上 27.50	" 25.00 ~26.00	13.00 ~13.50
寛政 4. 11. 2	古 0.143 ~0.145	上 0.200 秋 0.213~5	東 26.00 固 25.80	34.00	" 34.00	18.00
寛政 5. 9. 18			21.50			
寛政 6. 1. 11	0.175 地新 0.185	上 0.250 秋 0.270	固 20.00	29.00	" 28.50	14.50
11. 20	古 0.200	上 0.180 秋 0.190	固 20.80	32.00	"45.00 ~47.00 数子 31.00	16.00
閏 11. 18	古 0.200	上 0.180 秋 0.190	固 20.80 東 21.00	32.00	" 31.00 程	16.00
寛政 7. 1. 11	古 0.200 地新 0.205	上 0.183 秋 0.187	固 21.00	32.00	不 _子 31.50	16.00
8. 15			東 21.50	30.00 位		
寛政 8. 1. 4	古 0.150 地新 0.155	上 0.160 秋 0.165	固 21.50	31.00	" 30.00	15.50
寛政 9. 1. 初	古 0.152~3 地新 0.162~3	上 0.180 秋 0.190~200	固 17.00 位 東 17.30~17.50	26.50	" 25.00	11.50 ~11.60

油物干鰯	干 秋引 × 冬引口 後引△	鰯 重量 10貫目=付	粕 正 10 貫 目=付	小 豆 銀 10 匁=付	報 知 人 名	備 考
1 桶=付	1 桶=付					
上 2.80	△ 1.40	鰯 21.50	13.00	0.140 ~ 0.150		種粕 10.00
上 2.40	△ ~ 1.60	" 22.60		0.220 ~ 0.230	近江屋	
上 ~ 2.50		いわし 19.60				
上 2.50	△ 1.50		13.00			
上 ~ 2.60	△ ~ 1.60					
上 2.50		鰯 25.50	14.00	0.160	加賀屋	
上 ~ 2.60		鰯 23.50				
1.90	△ 1.50	鰯 23.50			近江屋	
2.70	△ ~ 1.60	鰯 25.00 位				
~ 2.80	△ 1.70	鰯 24.50	13.00	0.220 ~ 0.240		銭 6 貫 800 文
2.50	△ ~ 1.80	鰯 23.00				
~ 2.60	△ 1.50		12.50	0.200	近江屋	種粕 8.00 ~ 9.00
	△ ~ 1.60			0.200 ~ 0.210	加賀屋宗助	
2.30	△ 1.30	鰯 24.00	11.00	0.200		種粕 8.00
~ 2.40	△ ~ 1.40	" 18.00 ~ 19.00	~ 12.00		加賀屋	
2.40	△ 1.50	鰯 20.00	8.30 ~ 8.50	0.220 ~ 0.230	近江屋甚三郎	
~ 2.50	△ ~ 1.60	鰯 22.00	12.00	0.220		種粕 8.50
2.00	△ 1.60		10.00 ~ 9.00		近江屋	" 7.20 ~ 7.50
2.20			7.00		近江屋	
~ 2.30			11.00 ~ 12.00			" 8.00 位
1.70	△ 1.40	" 19.00			近甚	
~ 1.80	△ ~ 1.50	" 17.00 ~ 18.00	11.50			" 8.50
2.40		" 19.50	12.00	0.260	加賀屋	
~ 2.50				0.260	加賀屋宗助	
な	し				加賀屋宗助	
上 1.80						
~ 1.90						

年 月 日	上 米 銀 10 匁ニ付	越後大豆 銀 10 匁ニ付	走 り 鯖 重量 10 貫目ニ付	白 子 重量 10 貫目ニ付	数 子 重量 10 貫目ニ付	能 目 重量 10 貫目ニ付
寛政 10. 1. 4	古 0.157~60 地新 0.172~5	上 0.147~8 秋 0.155	固 20.80	27.00	な し	14.00
11.15	古 0.170~3 新 0.190 位	上 0.213~5 秋 0.220	固 21.60	28.60	不 子 28.60	14.60
寛政 11. 1. 4	古 0.180 地新 0.187	上 0.210 秋 0.215	固 22.00	29.00		15.00
寛政 12. 1.14	古 0.170 地新 0.177	上 0.180~5 古 0.193~5	固 24.50 東 25.00	33.00 ~ 34.00	32.00	16.50
享和 1. 1. 4	古 0.150 地新 0.160	上 0.165 秋 0.175	固 23.20 東 23.40	上 31.00		17.00
享和 2. 1. 4	古 0.173~5 地新 0.190	上 0.230 秋 0.240	正ミ 21.50	上 26.00		15.70
享和 3. 1. 4	古 0.170 地新 0.180	上 0.205 秋 0.217	固 18.00 東 19.00	上 24.50		13.20
文化 1. 1. 5	古 0.205 地新 0.225	上 0.240 秋 0.250	正ミ 19.20 ~ 19.30	24.50		13.50 ~ 13.70
文化 2. 1. 5	古 0.220 地新 0.210	上 0.180	正ミ 18.20 東 ~ 18.30	22.70 ~ 22.80		11.50
11.26			固 15.70 東 16.70	21.70	20.00	11.30
文化 3. 3. 1			正ミ 東 15.70			
11. -			固 17.70	25.00		13.00
文化 4. 1. 4	古 0.225 地新 0.225	秋 0.210 位	正ミ 19.30	上 25.50		13.70
文化 5. 1. 4	古 0.165~7 地新 0.165~7	秋 0.210	" 22.50	上 27.00		16.50
文化 6. 1. 4	古 0.140~8 地新 0.153~5	上 0.230 秋 0.242~7	固 17.70~17.80 東 18.70~18.80	上 23.70 ~ 23.80		12.00
文化 7. 1. 4	古 0.175 地新 0.190	上 0.235 秋 0.247	固 17.70 東 18.50	上 16.00 位		10.00
文化 8. 1. 4	古 0.190 地新 0.215	上 0.255 秋 0.270	固 18.20 東 19.00	上 25.00		13.00
文化 10. 1. 4	古 0.215 新 0.237	上 0.263 秋 0.270	固 17.20 東 18.00	上 21.20		12.50
文化 11. 1. 4	古 0.170~2 新 0.183	上 0.225~7 秋 0.232~3	固 17.00 東 17.80	21.00		13.00
文化 12. 1. 5	古 0.160 地新 0.187	0.252 ~ 0.253	正ミ 東 19.80	24.50		
文化 13. 1. 5	古 0.195 地新 0.210 位	0.260	正ミ 東 16.30	20.50		11.30
文政 1. 1. 5	古 0.200 地新 0.223	上 0.215 秋 0.225	正ミ 13.70 東 ~ 13.80	17.70 ~ 17.80		8.50
文政 2. 8. -			東 ~ 14.00 12.00 ~ 12.20	18.00 ~ 18.50	18.00 ~ 18.50	
文政 6. 2. 5			東 16.50		不 子 17.00	
文化 7. 12.22						



第2図 大阪・敦賀米価并敦賀鯉相場図表

敦賀米価 ---
大阪 " —
敦賀鯉相場 —

